
～東方古代録～

C I A捜査官

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～東方古代録～

【Nコード】

N5766S

【作者名】

CIA捜査官

【あらすじ】

女だらけの三国志から帰ってきた彼方。

それから3日後今度は人外ばかりがいる大昔の世界に行ってしまった。

彼方はこの世界でどう暮らすのか！！そしてうまく暇つぶしはできるのか！

もしかしたら東方キャラの出番が少ないかもしれない。

そして戦闘は常にセガール状態です。

セガールがわからない人は知らない方が幸せになれますよ。

どういうことかって？ストーリーがガタガタのカ☆カ☆シ小説ということですよ。

キャラの崩壊があるよ気をつけなされ。

しかも駄文なんだ信じられないだろう？と言う方はこの小説は読まない方がいいと思います。

前作の彼方無双〜どきッ現代技術ばかりの三国志〜は多分読まなくていいと思います。

主人公紹介のようなもの。(前書き)

頑張っています！

主人公紹介のようなもの。

佐々木彼方 ささき かなた

能力 無し（あえて言うなら逃げる程度の能力）

身体能力 ∞

年齢 20歳

種族 化け物みたいな人間。

身長 175cm

体重 65kg

髪は黒。

殺し屋、ヤクザ、軍隊をやったことがある。

しかし今は軍隊も辞めて平和に暮らしているため平和ボケしている。
しかし体は衰えていないため相変わらずのチートである。

口調は丁寧は基本的に丁寧。仲がいい奴は碎けた感じになる。

バックパックには色々な鋼材、火薬、素材が入っている。

いずれも大量に入っておりどう考えても許容量を越えている。

戦闘に関しては基本逃走。

みんながそれぞれ持っている能力は彼方には効かない（体質的なも

のらしい)

長生きしているのは主に気力。

喧嘩を売られた場合はもちろん買う(この時は逃げない)

戦闘能力は素手でも強いが、基本的にそこら辺に落ちているもので攻撃する。

空を飛んでいる敵には物を投げつける。

お人好し、そして兄貴的な意味で尊敬される。

宗教が大嫌い。

しかし差別も嫌いである。

一定の差別(一般人が許せる範囲内なら許してくれるかも)ならOKだと思う。

度が過ぎるとドンパチし始める。

演技が得意&嘘をつくのが死ぬほどうまい。

変装時は声を変える。

主人公紹介のようなもの。(後書き)

リニューアルじゃー

く第一話く大昔だあ？寝言言ってんじゃねえよ。(前書き)

ヒヤッハー作者の汚物(小説)は消毒だー！

〈第一話〉大昔だあ？寝言言ってんじゃないよ。

うん？ここはどこだ？なんてのはもう恒例の始まりかただ。

俺は元兵士の佐々木彼方だ。え、誰だって？まあ表の人間は知らないかもな。

俺は今まで幾度となく（2回だけど）異世界を渡り歩いてきた。

まあてっとりばやく言っちゃまうとまた異世界ってことですよ。

これで3回目なんだが、もう慣れちまって焦りすらしない。

まあまわりはお約束の木々（？）ですよ。

ここでなかなか困るのはどっちに行けばいいかわからないということだ。

GPSもこの山じゃあ役にたたないみたいだ。

最新技術ってのはこれだから・・・っとケチつけてても仕方ないな。

・・・とりあえず歩きますか。

まあ3時間歩いたところで荒野を見つけたんだが、中国の荒野か？

また三国時代にでもタイムスリップしたのか？

ここですごいことがわかったんだが、陸に生き物がいない。

軽く半径30kmの気配を探っているが陸だけは動物の気配が微塵もしない。

俺はそこまで学が深いわけじゃないが確か陸上に生き物が出来たのが紀元前約5、6億年だという話した。

。だとしたら今回ばかりは生きて元の世界には帰れそうにないな・・・。

まあでもあいつらなら俺がいなくても大丈夫だろ！

さて木しかない世界で（海もあるが）どう暇を潰していきましょうかね？

空腹は心配ない。その気になれば数十年はなんとかなる。

銃の改造、刀を鍛造、野菜を育てる、この時代の地図を書く、なんだ色んなことが出来そうじゃないか！

現代ではできないこともできるとか胸熱だな。

近くにあった石にこう刻む。

‘この石の傷は1990年生まれの佐々木彼方がここに生きた証である！’と。

なんかちよつとカッコイイ感じだな。

それじゃあ死ぬまでこのザ・紀元前を楽しもうじゃないの。

（10年後）

え、時間が過ぎるのがはやいって？人生こんなもんだよ気づいたらおっさんになってハゲて死んでるんだよ。

その間の銃の改造経過を見ていこうか。

名前 SK1

使用弾薬 45ACP弾

装填数 30

オプションパーツ サプレッサー

彼方が大昔に造ったサブマシンガン。

SKは佐々木彼方の略である。

本来のサブマシンガンとは違い弾をばらまくのではなく当たるようになっている。

つまり連射力より命中率を選んだということ。

サプレッサーはその命中率を上げるためのもの。

45ACP弾を使用しているのは威力を上げるため。

10年後の銃

名前 SK21

使用弾薬 SK用SP弾

装填数 200

オプションパーツ サプレッサー、四倍率スコープ

10年に渡る改造によって短所をなくし長所を伸ばした銃。

5km先の人間の頭を撃ち抜ける命中率で、当たれば頭が木っ端みじんになる。

しかも装填数も200と多く、下手な鉄砲も数撃ちや当たるとはよくいったものだ。

サプレッサーにより消音効果は抜群。

耳元で撃ってもばれないだろう。

まあ10年の成果ってところだ。

しかしこの10年本当に何もなかったな・・・。

春、夏、秋になれば畑と水田に出て、冬になれば木の家が潰れないように雪掻き（四季全て）をし……。

まあ普通に楽しかったけどな。

家はまあ簡単に作っちゃった。

木造だからたいして大変なわけでもない。

でもかなりの強度を誇るとは思うぜ？

そこいらのミサイルじゃ傷もつけられないな！

あの後本当に紀元前5、6億年なのか調べた。

まあ調べたって言うっても、海岸沿いを歩いて地図を書いただけなんだが……。

5年くらい（まさかこんなにかかると思わなかったが）かけて地図を書いたら、なんということでしょうでかい大陸が1つしかないではありませんか。

これはユーラシア、これはアフリカと予想をつけて地図に線を引いてみる。

よくわからんなあ。ぶっちゃけいつ大陸ができたかわからんし、というか俺が生きてることがすごいよ。

気温は何度かしらんがこれじゃ作物もそだてられないよなあ……種は改良品だが。

そうだなシベリア以上の寒さといったところか……。

とりあえず倉庫を造って佐々木家直伝の保存方法で色々な物を保管している。

佐々木家直伝ってなんぞ？と思う人は秘伝書の類だと思ってくれればいいんじゃないかな？

暇だしまた畑でも作るか……。

（100年後）

今日は130歳の誕生日！

「うれしくねえー！ー！」

年甲斐もなく叫んじまったぜ。しかし、人間の寿命って150だったわけ？にしても普通は75が限界だろ・・・。

俺もう人間やめてたのかなあ？でも150までは後20年あるから大丈夫だろ。

～さらに100年後～

今年で230歳なんだが・・・ちょっとこれはsyれにならんではない？

げふんげふんあせっても仕方ないか。

まあ他の人間より長生きということで納得しておこうか。

ぶっちゃけ背景に変化がある気がしない。

5億年前には普通の木があったのかもわからないし八方塞がりだ。

人類が現れるまで待たなきゃいけないのか・・・orz

～2億5千万年後～

もう飽きたねさすがに。今年で2億5千万230歳だ。

2億5千万年の間。ずっと畑、水田、銃の改造、塩の製造、酒の製造色々やってきた。

でも疲れたね。2億5千万生きるのがこんなに辛いとは思ってもいなかった。

まあそれなりに充実はしていたんだがね。

ここですごくいいことが起こった。

氷河期の真っ只中暖かい地域で発展している街を見つけたのだ。

この時代に人間はいないはずだがなぜかい。

そいつが気になった俺はその街に潜入することにした。

街の中は・・・現代そのものだった。

車が走ってるわけじゃないが、現代風の服をきて、街中を大勢の人間が闊歩している。

俺の身なりは特別浮いているわけでもなくむしろ馴染んでいた。

容姿は若いときのままこれで鏡を覗いたときは俺の方がびっくりしたが、もう割り切ることにした。

考えるのは得意じゃないしな。

そんな中だった赤と青の特徴的な服を着た人を見たのは。

「わお。変わった服だな」

まあ俺だったら救急車を呼んでやる所だが。

そしてその子を見つめているとその子がこっちに歩いてきた。

「あなた・・・ここら辺じゃ見かけない顔ね」

「そりゃあまあここら辺の人ではないですから」

「ふーん・・・ねえ、あなた今暇？」

これが噂の逆ナンってやつなのだろうか？

まあ暇なんだが。

「まあいいですけど」

くジジイ移動中く

「えっとここはあなたの家ですか？」

「そうよ」

なんというかなぜこんなぎこちない会話をせねばならないのか。
家に帰って寝たい・・・。

「私の名前は八意永琳よろしくね不審者さん」

あって間もなくなのに不審者扱いですか・・・。
まあしゃーないけどもな。

「俺の名前は佐々木彼方だ。よろしく」

「あなたがあの・・・」

「あの？」

「1990年生まれのはあなたが書いたのでしょうか？」

「?・・・! ああ! あれか! すっかり忘れてたなあもう2億
5千万年210年前の話だからな」

俺も歳だなw

「え?・・・今なんて言ったのかしら？」

「2億5千万年前か？」

「さらっと言われても困るのだけど」

事実を言っているだけなので俺にはどうしようもないんだがどうしろと？

「俺はちょっと運が悪かったみたいで俺が住んだところより数億飛ばされた」

「それはちよつとなのかしら？」

今となつては億単位の年数もちよつとに思える。

「まあ経験者の言葉だから信じなさい。そしてこの街を発展させたのは君かい？」

「ええそうよ」

天才ってやつだな。

「天才も辛いなあ、上の連中に言い様に使われてるんだろ？」

「あら、そうでもないわよ？」

「ふーん外壁の装備を見ればいかにもな感じもするが・・・まあ防衛用なのか攻撃用なのかは聞かないでおくよ」

「あなたは2億5千万年前から生きてるって言ったけどそれはどうということなのかしら？」

「そうだな科学じゃ証明できないことかな？俺もどうしてこうなったのかは考えたくもない。キャパシティを越えちまう」

もういかれてるから関係ないか？

まあなんでこんな問いがきたのかは天才故ということにしよう。

「戻る気はないの？元の時代に」

「戻ろうとは思わないな。戻ってもやることもねえし」

「そんなものかしら？」

「そんなもんさ。それよりこの街なんか変じゃないか？」

「そのことなら今から説明するわ」

永琳が言うには街全体に特殊な結界があって時間が長くなってら
しい。

まあ意味がわからんってことだな。主に原理が不明だ。

「その妖怪ってのが人間を襲ってるんだな？」

「ええ、だから月に逃げるの」

ここでさらにすごい話。

地上には妖怪がいるらしい。なんでも人間の恐怖の念的なもんから
できてきたらしい。

そいつらが人間を食べるということだ。

しかし人間を魚だの食ってるわけだからなあ・・・。

やっぱり自然界は厳しいということだな。
弱肉強食って言葉の重要性がわかるぜ……。

「穢れてるか……気に入らねえな」

俺としてはここの連中を消してやりたい所だが、”今”は止めておこう

「確かにあまりいい言い方ではないけどね」

「永琳は地上派か？それとも移住派？」

「本当は地上にいたいけどみんなが必要としているから月にいきなりきやならないのよ」

まるでお姫様だな。

まあ白馬の王子役は誰かに任せるとして今は永琳の話聞こうか。

「地上に残した連中は全員見捨てるってことか」

悲しいがこれも現実ってやつだな。

「防衛隊と地上派が残るみたいだけどここももう長く住めるわけでもないし……」

「それでも地上からは離れたくないんだろうな」

まあ地上が穢れてるとか言ってる連中を助ける気にはならんが。

「まあ暇だったら妖怪をなだめるくらいはしてやるよ。その変わり

こっちからも攻撃は仕掛けないことだ。争いは争いを生み。憎しみは憎しみを生むそういうことさ」

「わかったわ。あなたの言葉に従うわ」

「まあ時には自分で判断をくださなきゃいけないかもしれないがその時は悩む必要なんてない。両方やればいいのさ」

「・・・つく、あはははは」

永琳がいきなり笑い始める。

結構シヨックなんですけど！笑うのやめて！

「ごめんなさい。真顔でそんなこと言うもんだから」

「悩む時間があつたら両方解決する努力をしろってことだ。それとさっきの話だがロケットを1基多く作ってくれ。地上の連中もまとめて月に送ってやるから」

「そんなことできるの？」

「1秒くれればできる」

不可能なわけじゃないむしろ簡単だ。

問題はロケットにほうだ。

途中で爆発となれば希望は残されてないだろうな。

まあ俺には関係ないことなんだが。

「まあいい今からその妖怪とかいう連中のところにいってくる」

さっき妖怪はなだめると約束したなあれは嘘だ。

くジジイ移動中く

「ここら辺か」

みなれない木ばかりの森についた。

この時代の木なんてどこ見ても見れない木ばかりだが。

とりあえず妖怪っぽそうな奴を斬っていく。

妖怪の中にも色々いるんだろう。

人間を敵として見てるか、食料として見てるか、あるいは味方として見ているか。

戦意の無い奴はほっておく。いかにもな奴は切り捨てていく。この手順の繰り返しだ。

妖怪っていうもんだから結構強いと思ったらチンピラレベルだったぜ。

俊足で永琳の元に帰る。

窓ガラスを破りダイナミック☆帰宅。

「戻ってきたぜ☆」

「もう話合いは終わったの？」

「ああ、敵意がある奴は消し炭にして敵意の無い奴は襲わないという約束と俺が食料配給すると約束してきた」

「なだめたんじゃなかったのかしら？」

「敵意のないやつはな」

まあちよつとやりすぎかなと思ったけど。

「まあ今回は妖怪が人間を襲ったから妖怪を殺ったが、人間が妖怪を襲えば人間を殺る」

「どうして？」

「俺は差別が嫌いだからかな？」

まあ妖怪にまで平等を与えなくてもいい気がするけど。
まあ神様はいたとしたらぶっ殺すわー。仕方ないね。

「あなたが化け物なのはわかったわ」

おおー、事実とはいえ結構辛辣な言葉。
数億年ぶりの会話がこんなに酷いとはね・・・。

「後は待つだけだな・・・」

（3ヶ月後）

「本当に行かないの？」

妖怪を殲滅してついに永琳が月へと行く日がきた。
つまり永琳とお別れってことだ。

「俺はなにがきても地上に残る。例えあんたらが言うように地上が穢れていてもだ」

「そう・・・」

「後、1つ言っておく。二度とここには戻ってくるなよ。もし戻ってきたら例えあんたでも容赦なく殺す（多分忘れてなければ）」

残念ながら月に逃げるような連中を擁護する気にはなれない。

地上をバカにした上でここに戻ってくるのなら、それ相応の償いはしてもらおう。

「まああの連中が戻ってくるとは思えんが一応、な。じゃあ元気でやれよ」

「ええ、あなたもね」

永琳が乗ったロケットを見送る。

ここ数億年まともに話した人間だったが・・・まあいいさ出会いがあれば別れがある。でもまた会えるさ。

これはきつとじゃない必ずだ！でも会えたら殺さなきゃいけないな。あんなこと言わなきゃよかったよ・・・。

もう少し自分の発言に責任を持ったほうがいいな。

く第一話く大昔だあ？寝言言ってるじゃねえよ。(後書き)

ああん！？(新しい小説)挿入ったやろ！？

「第二話」(この世界を)支えてんのは妖怪だ。人間じゃないんだぜ!?(前

更新が遅くなっていやあスイマセーン。

許してや?読者の皆様。

読者「駄目だ」

そんなあ。

〈第二話〉（この世界を）支えてんのは妖怪だ。人間じゃないんだぜ!?

一応永琳との約束を果たすために地上の連中を気絶させ、ロケットで月に送ってやった。

まあ刀で峰打ちにしたんだが。

しかしなかなか数が多かったから、少し大変だったぜ。

そういえば人間がいないのに妖怪ってどうやって生きていくの? と思ったが、妖怪連中には『あんたがいるじゃないか』と言われた。それでいいのか妖怪。

まあ妖怪そのものがokと言ったんだからいいんだろうが、妖怪って氷河期越せるのかな?

いつぞやも言ったとおり今はシベリア以上の寒さだ。

今は妖怪もののほほんと暮らしているが、いつかはまた人（俺）とやりあう日がくるのだろうか? まあ特に戦う理由もないからなあ。そう考えるとなぜ俺は月に行く連中を助けたんだろう? あのまま妖怪と闘わせるか俺が殺せばよかったのにな。

まあ情が沸いたってことか。俺も丸くなったもんだな。

畑作りなどにも妖怪に手伝ってもらってるんだよね。

まあ自給自足ってやつだな。

「彼方さんどうですかね? この野菜。今年は不作だと睨んでるんですが」

さっそくお呼びのようだ。

「今年の不作はほぼ確実だからなあ・・・備蓄食料でいくらでもま

かなえるが、それでも収穫がないのはきついなあ・・・」

「まあそこら辺は若い衆が頑張ってくれますよ。私らみたいな年寄りは豊富な経験を若いのに教えてやるだけです」

「徳さんだって俺より若いじゃない」

さっきから親しげに会話しているこの人、もとい妖怪は徳とく 茂人しげとだ。俺の次に最年長でみんなからは徳さんと親しまれている。

月の云々のときに真っ先に人間と争うことを止めた妖怪だ。

この人が主軸になってみんなに停戦（変な言い方だが）を呼びかけてまあ無駄な争いはかなり減ったと思う。

「彼方さんと一緒にしないでくださいよ」

まあ数億なんて生きてたらそう言われても文句言えないけど、やっぱりショックだよね・・・。

数年前に人がいなくなつてからは妖怪が一ヶ所に集まって農作物を育てるという結果になった。

暇だったのか腹が減ったのかは知らないが、まあバチカン市国みたいな小国になってるわけで。

1匹、1匹ちゃんと畑、水田を持っている。なかなかの面積だが耕運機を使つてるので問題ない。

というか、機械を使える妖怪ってすごいな。そのうち妖怪畑耕しかでてくるんだろうか？　ただ畑耕しに恐怖しないことだけは言っておこう。

「神様にでも祈るか？」

「神様嫌いの彼方さんが？」

長い付き合いだとそういうことにも突っ込まれるもんだな。

「冗談だよ」

苦笑しながら言う。

「にしても今年の寒さは異常だな」

「去年が暖かったというのもあるかもしれませんがね」

たしかに去年は氷点下60度くらいだったからな。

今年はまあ寒いほうと言えば寒いな確かに。

元々人が住むような気候じゃないがな・・・。

まあ俺は例外と考えれば後は妖怪だけだしなあ。

それでも寒さに弱い妖怪は死んだりしたみたいだが。あれだな妖怪も進化しないといけない時代なんだな。

まあ大変な時代だよなあ。

「徳さん後は頼みますよ。自分の畑をみてこなきゃならないので」

「若いのは俺が見ときます」

「頼んだよ」

徳さんを置いて自分の畑を見に行く。

何億年と耕してきたせいか技術は身につけてる。

数億年たったということでは化石燃料つまり原油もとれるようになった。

まあ量が多いわけではないが。

何しろ気候の関係でなかなか採掘できないからだ。

気候が安定すれば採掘量もいくらでも増やせるんだろうけどな。
まあ今は作物だけで我慢するか。

多分だが今の食料備蓄はすごいことになっているはずだ。

倉庫の数なんていくつだったかも忘れるくらいにある。

2億5千万年作ってきた作物の量は数万の妖怪を計算上5億年養える量だ。

「この畑も年寄りになっちまったな」

数億年付き合ってきた、まあこんな言い方は変かもしれないが相棒みたいなもんだ。

うーん。一通りやることはやったんだよなあ。

ダチからもらった、グリモワールとかいう本でも読むか。

く老人朗読中く

どうやらこの本は魔道書ってやつみたいだ。

読み方は異世界の魔法使いのダチに習ったんだが、これって唱える？
だけでいいんだろうか。

「ファイヤウォールとかパソコンのソフトみたいな名前だな」

現代語が通じないのは色々不便なわけでして。

カタカナ語も通じないし、英語はもちろん、今とは言葉の意味が違
うとかね。

この話はいくまで昔（この時代よりは未来）の話だ。

妖怪には英語、カタカナ語は通じなくても会話は普通にできる。

……たまに人語じゃないやつもいるが。
それでも話是可以る。

まあ簡単に言えば妖怪語ってところだな。

しかし聞いてると日本語の方も、妖怪語の方も訛りが入ってる。
そこはやっぱ日本の妖怪だからなのだろうかと思ってしまう。
どこの訛りかはわからないけど。

話を戻すと、魔法の名前が結構普通（ダチがつけたのだろうか？）
の名前だった。

問題は唱えられるのかっていう話。

そのダチにお前は魔力が多いと言われたが本当だろうか？ 魔力はR
ルブレイング マジックパワー
PGでいるMPのことだな。

「よし、じゃあ一発いきますか。ファイヤウオール！」

と唱えた瞬間自分のまわりに炎の壁が出来上がる。

……移動できないっていう欠点があるな。

それと暑い。

ん……でも氷河期だから便利か。

炎系の地面に拡散タイプはないのかな？

「んーこれかな？ ボムショット！」

グレネードみたいに飛んで行って爆発した。

炎じゃなくて爆発魔法か。

まあグレネードランチャーだと思えばいいか。

多連装式グレネードランチャーだな。

まあ魔法なんて使うつもりもないけど。

魔法唱えるより銃をぶっ放した方が早いし。

この寒さで動作不良を起こさないようにするのは大変だ。

まあ頑丈さと手入れの少なさで結構人気だが。

人気といえばM1911A1もかなりの人気だった。

やはりどの世界でも愛される名銃ってことなんだろうなあ。

アメリカでは数十年、妖怪には数百年。

すごいとしか言いようがないな。

なんで妖怪が銃を使ってるのかって？

そりゃあ、俺が教えたからかな？

最初は触れるのも恐がってたがさすが妖怪とでも言えいいのかすぐに慣れて、いとも簡単に扱うようになった。

まあそのおかげで俺の親衛隊なんてできちゃったが。

いや親衛隊なんて言ったって短機関銃を持ってる軍隊格闘を習ったゴッとおっさん供だ。

見た目は若いかな。

まあ人類が生まれるまで後1億年くらいあるわけだ。そうになったら俺たちもはれて平和に暮らせる。

今が平和なわけじゃないが寒いよりは暑い方がいい。

（1億年後）

時間が飛んだ？まさか。

あれだな大人の都合ってやつさきつと。

あれから（あれってなんやねん）1億年がたった妖怪も全部逝っちゃった、わけでもなくまあ半数は残ってるな。

人間の祖が出てきて石器で色々とやっている。

ここに未来技術を叩き込みたい所だが多分言葉が通じないのでやめ

ておく。

石で叩かれたりしたくないしな。

妖怪の生活はいつも通りだ。月曜日に訓練があつて、火水木金と畑仕事、土日も畑仕事、まあ趣味とかもあるんだろうがそこら辺はよくわからん。

月曜日の訓練が年々キツくなっていつているのにも関わらず簡単にこなしちまうのはどういうことなんだ？

まあ今のところ史上最強の生物だろうな妖怪は。

氷河期で全滅したわけでもないし、人間がいらないから消滅したわけでもない、と思ったんだがもう妖怪じゃないんじゃない？

ただ妖力とかいうのは感じるから（微量にだが）妖怪なんだろうが年々大きくなる妖力を抑えてるのはダチの本に書いてあつた術を使っている。

ダチはきつと天才か頭がイカレてる。多分天才の方だが同時にイカレてるな。

バカと天才は紙一重って言うのはこういうことなんだろうな。

まあその危ない友人の書いた本のおかげで助かったからよしとしよう。

魔法もその本に書いてあるとおりは全部覚えたはず。

使わないもんを覚えても仕方ないんだがまあ必要になるかもしれないから一応な。

銃もまた大量に改造＋生産、製造をした。

名前 SK586

使用弾薬 SK用SSP弾

装弾数 1250発

重量 2kg

オプションパーツ サプレッサー、4倍率スコープ、GR-98（25mmグレネード弾2発装填）

数億年を経てパワーアップしてきたこのサブマシンガンは、ゆうに物理法則を無視し、最高かつ最強、そして凶悪な武器になった。オプションパーツについている2連グレネードランチャーは25mmと小さいが威力は40mmの数倍以上である。ただし軽いので風の影響をもろに受ける。

追い風時使用注意！！

威力に関しては相当強いと言うしかない。

射程距離は数10kmあるが室内戦に向いている。フルオートでも取り扱いが簡単でグレネードランチャーの下に銃剣（短刀）をつけることができる。

名前 K1グレネード

使用火薬 無臭改良火薬

以前のグレネードは長年妖怪兵に使われてきたが、ついに火薬改良に成功し世代交代をすることになった。

このグレネードは家屋をぶっ飛ばすので（人質を助けるのには向かない）取り扱いが大変難しい（というか妖怪連中が結構雑に扱ったりしてるだけ）つまり普通に使えば問題は特にならない。

名前 YOUNKAI

使用弾薬 50. BAKEMONO

装填数 45発

重量 500g（マスターキは300g、銃剣は1kg）

オプションパーツ 4（30倍率スコープ。マスターキ（スラッグ弾10弾薬が発装填、小型弾倉式）銃剣（短刀、射出可能）

ネーミングセンスを疑う銃と弾薬だが威力、扱いやすさ、反動ともに素晴らしい狙撃銃。

射程距離約数百kmにも及ぶ銃だが、有効射程距離は実質50km。名前以外高性能な銃、違う意味で惜しい。

名前 SG555

使用弾薬 8ゲージショットシェル（散弾、スラッグ弾）

装填数 100発

重量 200g

オプションパーツ フラッシュライト。銃剣（短刀）

ドラムマガジンで尚且つフルオートで撃てるほぼ全ての状況に対応できるショットガン。

反動がほばない上にスラッグ弾で壁ごしに敵を撃ったりできる。妖怪に使用する際も強い威力を発揮する。

名前 RPG-7

使用弾薬 R P G P K 弾

装填数 1

重量 2 k g

オプションパーツ 4 ～ 10 倍率スコープ。

旧ソ連が開発した対戦車兵器を改造した品。

妖怪達にも R P G のほば無反動に感心して好んで使用する者も多い。
元からリアルチートな武器。

なぜなら対空攻撃以外に全て使用できるからだ。

昨今連射可能で威力、射程距離を伸ばすように頑張っている。

弱点の撃てば位置が特定されるのは改良されているので、より使い
やすい兵器になった。

・
・
・
・
・
・

「人間か・・・」

長い間妖怪と暮らしてきたが、歳をとるごとに丸くなってるような
気がする（妖怪が）

見た目も歳よりっぽくなってまあ身体能力は若い連中より上なんだ
が。

何億年たった今も結局、畑、水田仕事、酒造り、塩製造、刀、銃の

製造、改造まあその他もろもろやってきたわけですよ。
妖怪達も今じゃ立派な職人に・・・。

「彼方さーんちよつときてくださいーい」

感傷にひたる隙もないか・・・まあやることがあるのは幸せだがね
(笑)

俺がまるでヘルパーなのは仕方ないね。

「はいはいお呼びですか？」

「この米を見てくださいこいつをどう思う？」

「採点してやろう」

「採点？」

「100点だよ」

ただたんと言いたかったただけなんだ。
許してや？城之内（誰

「まあ米はそこそいいな」

次回RIKISHIはチャンコが好き？に続く！（次回はRIKISHIだと言ったなあれは嘘だ）

「第二話」(この世界を)支えてんのは妖怪だ。人間じゃないんだぜ!?(後

今回の作品どやあ・・・

読者「駄文ぷりを採点してやろう。100点だよ(ズドンズドンズドン

グフツ!

〜第三話〜どうして時代の流れがはやいんだ？もっとゆっくりすればいいのに

相変わらずの駄文・・・しかしネタはいれる（キリッ

第三話　　どうして時代の流れがはやいんだ？もっとゆっくりすればいいのに

妖怪と会話する日々。

別に人間が恋しいわけじゃない。

会話ができれば犬だろうと猫だろうとなんでもいいのさ。

現在妖怪が5632匹（紀元前1億5千万年前調べ）なんだが、みんな色んなところに旅にでたりで残ってる連中は古参妖怪（紀元前3〜2億年辺りの妖怪）ばかりで、だからなんやねんって話なんだが。

まあ簡単に言うと妖怪も減っていつてるんだよ。

もしこのまま時代が進んで妖怪と人間が戦争になったらどうしよう。人間側につくか、妖怪側につくか。

まあ鍛え上げられた古参連中が人間に負けるとは思えんが。

俺は最古参だからな、老兵は去るのみか……。次代に託して俺はさっさと消えようかな？

「ということで旅にでます」

古参連中に相談してみた。

徳さんなら理解してくれるよ。

「ということって・・・どういう意味で？」

「何となく旅に出たいなーと思って」

「後継者を決めなければ」

「じゃあ徳さんで」

「自分にそんな役が出来るでしょうか？」

「大丈夫徳さんならじゃあ行ってくるよ」

「今からですか!？」

「なに何年かしたら戻ってくるよ」

そう言って長いこと暮らした場所から出て旅に出た。

旅なんていってもただ歩き回ってるもんだ。

實際旅をしたことのない俺にはわからんが。

まあでも今回の旅は見聞を広めるところだから色々と見て回らないとな。

↓数日後↓

やっぱり車でくればよかった歩くの地味にきつい・・・。

歩き回って数日、疲れこそなかったが、道ボコボコして歩きづらい・・・。

しかも人って言ったってほぼ猿人だし・・・。

人間が生まれるのは紀元前約6～500万年前くらいだから、後9千4百万年か・・・。

億って単位がいまいちわからなくなってきたな。

感覚が鈍くなってるというか、何と言うか。

うん? ちょっと待てよ。

じゃあなんでこんな大昔に猿人がいるんだ? 猿人って約紀元前700万年前に生まれたんじゃないかなかったつけ?

てことは猿と勘違いしてたのか? 俺・・・orz

まあ俺の旅はまだ始まったばかりだからな。

（数年後）

数年前始めた旅はあっさり終了のお知らせ。

まあ仕方ないね。妖怪は強い連中ばかりだから何もなかったんだが、どうやら噴火云々ということらしい。

つまり地形が変わるってことだな。

（1億4千6百万年後）

やっとしっかりした人間が誕生したよ。

嬉しくて言葉もでないです……。

さっそく俺はある行動に移った。

言葉を教えることと文字の書き方を教えることである。

そりゃ最初は全然わからない感じだったが、いくらか慣れて来るとスラスラと話せるようになった。

しかもさらに嬉しい事に妖怪と仲がいいのである。

思えば数億年前、現代並の文明があった都市で妖怪とドンパチしそうになってたなあ。

そのときは人間と妖怪は相容れない存在なのかと思ってたが、今妖怪と人間が話してるのをみてそうじゃないなとは思った。

文字だって書けるようになったしな。

ただ妖怪に人間が字を習ってるところを見ると吹き出しそうになるが（笑）

人型妖怪ならいいが、蜘蛛妖怪とかの類とかは本当に笑えるというか違和感しかない。

蜘蛛怖いよ蜘蛛。

実は俺蜘蛛が大の苦手なんだ……蜘蛛が敵に回ったら惨殺しちゃ

うかもしれない。

惨殺どころか存在を消す。皆殺しどころじゃねえぜ。
ヒヤッハー蜘蛛は消毒だー！！

「先生遊んでー遊んでー」

「よっしゃおっちゃんが遊んだろ」

こういう触れ合いも大切なんだぞ？

というか久しぶりに人間と話した気がするんだけど・・・。

久しぶりの子供には癒されるよ・・・ロリコン的な意味じゃないかな？

「待てー！！」

「誰が待つもんか！」

遊ぶときは大人も子供もないんだぜ！？

遊ぶときは思いつきりやたらとな。

子供のことに遊ぶことによって子供は健全に育成されるんだ！！！！！！
失敗を恐れず、時には笑い、怒られ、悩むことも重要だけどそんなのは大人になってからでいいと俺は思うね。

「よし捕まえた」

「ハアハア、早すぎるよおじちゃん」

おじちゃんとかっていう歳じゃねーぞ！？もはや化石だよ、古代の遺物レベルだよ。

結構若く見えるって言うのは結構うれしいけどさ・・・。

・ ・ ・ ・ ・

「よし！またおっちゃんが明日遊んでやるからな！」

「うん！また明日ね！」

ふう体力的にはきつくないが子供の体力もすごいな。

まさか朝から夕方までとは・・・にしてもこの時代の子供の隠れっぷりがすごいんだが。

カメレオン顔負けの隠れかただ。

あいつら実は殺し屋とかじゃないよな？後の忍者とか。

もしそうだったら仕事のにはあってるかもな。今のあいつらからは予想もできないが。

というか汚い仕事は俺だけで十分だろう。

あの子達には普通に生きてほしいね。まあこの世代だからかもしれないが、妖怪と普通に話していうのはやっぱり何回みてもおかしい。

しかしこの時代っていうのは想像以上にすごかったね。

食料が無くなったら他から奪って来るとはね・・・食料不足と犯罪が密接に係わり合っているのがよくわかった。

まあこの時代では正当なんだろうが。

まだ法律のほの字もないからな・・・。

少なくとも妖怪と仲がいいこの村には襲撃して来ないみたいだが。

妖怪降下猟兵の出番はなさそうだな。

あとスナイパーも。

ただ略奪する村ばかりではないな。

そういう村には技術を教えたし、米（当時はなかった代物）や砂糖、高麗人参（増やすことができない野菜だが、改良して栽培できるようにしたもの）とかあるといいものを教えた。

時期が来たら塩や味噌の作り方も教えないとな。

日本人にはなかなかかせないものだし、特に塩は人間にとってかせないものだしな。

実は日本はまわりが海だから海から塩をとるが、普通は陸からとれるものなんだぜ？塩って言うのは。

岩塩ってやつだな。名前くらいは聞いたことがあるだろう。

まあここは後の日本だから海からとればいいんだが。

にしても火山の噴火は迫力があつたなー。

近くの妖怪と一緒に酒飲みながらみてたもん。

あんなの見せつけられたらさすがの人間も妖怪も勝てないって思っちまうよ（笑）

自然の力は無限大なりってか？

まあ自然の力なんて見せ付けられた、俺なわけなんだが、特に人が死んだりはしてないみたいだ。

木が蒸発したりしてたが。

（数年後）

「大変だー！」

その騒ぎがあつたのは天気がいい夏の中旬頃だった。

「zzz・・・はっ！」

な、なんだ！？

「隣の村の連中が攻めてくるぞー！」

この頃になると戦争の目的は食料ではなく領土になった。
もちろん民主主義なんてない時代だから実質独裁制（君主制）だ。
言葉も広がってきて、普通に話すようにもなった。

「警備の連中は！？」

「待機中です！」

さすがに寝起きは辛い！がおとなしくやられるわけにもいかないしな。

つまり正当防衛ってことだ。

《第七中隊応答されたし》

《こちら第七中隊。現在敵100m地点で待機中》

《了解、AC-130の到着を待て》

《了解。待機します》

「ふー。これで大丈夫だろ」

流血沙汰にならなければいいが。

《こちらAC-130a。本部応答願います》

《こちら本部どうぞ》

《敵軍団にスタングレネードの発射許可を！》

《了解。発射を許可する》

《第七中隊応答せよ》

《こちら第七中隊》

《AC-130がスタングレネードを敵に撃つそうだ。スタングレネードが爆発したらすぐに取り押さえろ》

《了解。スタングレネード、スタングアン、モシン・ナガンの使用許可を》

《了解、非殺傷武器の使用を許可する》

《スタングレネード発射……着弾を確認》

《第七中隊は制圧を開始せよ》

《了解》

よしこれで終わったな。

しかし急に動き出してくるとは……うかうか寝てられないな。警備強化は確定だなこりゃ。まあ死人がでずに何より。

まあ心臓が弱かったりするとスタングレネードでも死ぬときはあるが。

（2年後）

「暇だな」

2年前の戦争（まあ一方的にのしたんだが）では被害なしだったがその後も懲りずに戦争をしかけてくる。

あいつらは暇なんだろうか違う土地を攻めるといふ思考はないんだろうか？（笑）

まあ実質訓練みたいなもんだな。

相手側の戦争派のリーダーも崖から落ちて死んだらしいし（検査の結果誰かに殺されたらしい）隣の村は友好を示している。

大和の時代がくると本格的な戦争になるんだろうか？

「経験上暇の後は忙しくなる確率が高いな」

最近で言えば水害、干ばつくらいか。

しかしうちの作物はそんなにやわじゃないからな。

干ばつにも負けず、水害にも負けず。

彼方

ただ高麗人参がいくらか被害をうけたが。

まあ仕方ないね。

高麗人参なんて生きてくのに困らないほどあるからな。

そーいや新しい事業に手をだしたんだ。

金鉱掘りと石油採掘。

どうせろくな使い方をしないんだから俺が使ってやるよ。

まあ保存するだけなんだが。

ゴールドなんてあってもこの時代貨幣なんかあるのかって言われればそんなものはないし・・・まあ価値はないな。

あれだ物々交換ってやつだ。

昔ながらそのへんはしっかりしてると思う。

まあ石の貨幣なんかもあつりするんだが。

すごく重いです……まあ石だからしかたないんだが……。

そして農業を発展させるために、鉄製道具の作り方を教えた。

やはり木製とじゃ雲泥の差だ。

余りにも使いやすかったのか木製の農具が負けたのが悔しいのかorzしてる人もいたが……。

こりゃあ迂闊に銃も出せないな……。

第一次世界大戦を紀元前に起こす気などさらさらない。

だって弓の鏃だって石の時代だぜ？

そんなところに未知の武器を差し出すのはみすみす戦争してくださいって言うてるようなもんだ。

わざわざ火種にガソリンをかけて火をつけてやることもない。そう
だろ？

まあ今は平和だからなあ。他の村の連中も本気で攻めてきてるわけ
じゃないし。

妖怪が一時期問題になったが、そこは一定の縄張り内から出ない。
出た場合は正当防衛以外の攻撃は禁ずる、ということになってる（
らしい）

ぶっちゃけ人間でも守るか怪しいもんだ。

第二次世界大戦の日ソ中立条約みたいな感じだ。

最後は破るってところだな。

まあスターリン曰く条約は破るものらしいからな。

しかし当のソ連もドイツに裏切られてたが。

えっと何の話だったっけ？ああ農業か……しかし高麗人参って本
当によく効くんだな。

友人が言ってたのは嘘だと思ってた。

まあ見たのが数億年前だったがガンとかの人に飲ませるとたちまち治っちゃう。

うーんまさに医者いらず。万能薬とも言うか。まさにゲームの世界。

「彼方さんオラの畑さ見てくんろ」

「了解」

訛りは昔からあったらしい。

この時代で標準語もクソもないんだが（笑）

思ったんだけど・・・俺事あるごとに畑or水田を見てるな・・・
いやいいけどさ。

「いいんじゃない？ただ病気にかかってる苗もあるみたいだけど・・・」

あちゃーこりゃ結構ひでえや。

「でも全滅はしないから大丈夫だと思うけど・・・」

「そうですか、どんもです」

この時代だから米もそこまで品種改良してるわけでもないし、まず気候がガタガタだ。

人間が住めない気候じゃないだけまだましかもしれないが。

人間が出現したがまだ神様はいないようだ。

まあ現代人から見れば当然なんだが、昔は違う（と思う）から妖怪だっている。

多分時代がたつにつれて妖怪も生きる道を失っていくんだろうな。
畏れっていうのがなんなんだかよくわからんが、恐怖心を糧にして

るらしい。

恐怖心Ⅱ畏れなのか？

でも俺は畏れてないのに、一緒に住んでた妖怪連中はなんで消えなかったのかは多分気合いだな。

ただたんに気合いで片付けてるだけです。

だって真相を探るの面倒くさいし・・・。

長く生きてると色々は無頓着になるんだよ。

何もかもがめんどくさくなる。

性格の問題だろとかは突っ込まないでほしい。

〔西暦300年辺り〕

俺は歴史の生き証人になっちまった。

あのキリストが処刑されたところを見たんだ！

大昔だからこそその話かもしれないがあれにはビックリだ。

西暦は今ここに始まったって感じがしたなあ。

それはそうとそのキリストが死んでから300年西暦300年だな。俺が生まれる1690年前の話だな。

まあそんな話はどうでもいい。

今は軍事会議中なんだが妖怪のまとめ役がなにか言っている。

多分兵力とか迫撃砲、榴弾砲とかそういう話をしてるんだろう。

なぜこうなったかという話は数ヶ月前に遡る。

〔数ヶ月前〕

西暦300年神様が生まれてから随分年が経った。

神様は人間の領地争いより汚いことを始めた。信仰争いである。

よくわからんがとりあえず大和とかいう大きな一括りの神様集団的

なのができているらしい。

従わないなら従わせるまで。

なんてことはない神は死なない存在だとされてきたが簡単に消えちまった。

死んだって言うのとはまた違うんだろうが。

とにかく最近ではやつらの圧力もなかなかのものだ。

俺が済んでる国（一応）も周辺集落に兵士を設置、固定機関銃から支援機、戦車から迫撃砲、榴弾砲まであらゆる武器を配備、装備させ国境はかなりものものしい雰囲気になっている。

村民の安全を考慮して当時比較的安全だった東北への移住も議会で提案したが『先祖代々の土地を離れることはできん！』ということで否決された。

臨時皆兵制度を導入し1ヶ月の訓練をし、ある程度の銃の使い方は覚えさせた。

村民には夜間外出禁止令（1人の出歩きは禁止）をだし武器の携帯（登録された銃）を認めた。

土地的には狭かったが労働力も増し畑の収穫量が多くなり果物などの生産が進んだ。

食料の普及は人妖の増加を促した。

人と妖怪の夫婦も多くなり、人と人との関わり合いはより密接になった。

文化は現代より下だったが田舎の顔見知りのなものが多かった。

ヤクザ妖怪の抗争も止み偵察や警邏に貢献した。

すべては順調だったというか順調にさせた。

〜第三話〜どうして時代の流れがはやいんだ？もっとゆっくりすればいいのに

駄文でも更新速度がはやかったらどうだろう？
ないな。

〜第四話〜へいへい、幼女（神）だ悪かねえぜ（前書き）

今回はそれなりのスピードかな？

まあ普通に考えてこれでも結構遅いんだろうけど。

まあそれなりに更新していきますのでこれからお願いします。

《》は無線で話しています。

「第四話」へいへい、幼女（神）だ悪かねえぜ

そしてまた軍事会議に戻る。

「~~~~~」

いっそのこと神様なんざ全員消すかこの世から。

外国の神様は知らんが、今現在日本の神様は戦争の火種だ。
アジアの火薬庫とでも言おうか。

「大統領この件についてどう思いますでしょうか？」

「ちょっといいか？国境の守りはいいが実際神の力の方はどうなんだ？被害は出ているのか？」

古参妖怪が言う。

「そちらの方はまだ被害報告がきていないので大丈夫だと思います」

「よしみんな聞いてくれ。彼らは村民の意志を無視し、力で信仰させている。そのために田畑はあれ村民は飢餓に苦しむ。たとえその後どんな奇跡を起こすそうともその事実は消えない。日本自由民主主義国として見逃すことはできない。俺たちは攻撃するのではなく助けるのだ。神達とは違うところを見せつけるぞ！」

「「「「「「「「sir yes sir!」「」「」「」」」」」」」」

「この救援に当たって確認しておくことがある。敵から攻撃がない

場合の攻撃は許可しない。敵であろうと非戦闘員は襲わない。村民、付近の妖怪の安全を確保すること。この救援作戦は第1、2、3連隊で行う。救援した村民は一時難民としてこの国が預かる。このことだけは守ってほしい」

「了解しましたその旨みなに伝えておきます」

付近の村民は既に村ごと退避しているところもあるようだが、いくつかの村は神の戦いに巻き込まれて死人もでているそうだ。

何名かはAEDの緊急措置で助かったみたいだが。

神のやり方なのか知らんが生贄を捧げさせるところもあるようだ。

確かにこの世界が普通だったら誰も批判はしないだろうが今は俺たちがいる。

時代を先取りした民主主義政治、人間と妖怪の壁を越えた政治。確立した憲法。

みんながみんな神が嫌いなわけじゃない、でもみんなが気に入らないところがただ一つある。

好き勝手やっているとこらだ。

自由を知ったからこそ批判できるのかもしれない。

または自由と横暴の区別がついたのかもしれない。

少なくともこの時は満場一致ってことだ。

そして俺は何を思ったのか諏訪大社に出かけた。

く諏訪大社く

諏訪大社は諏訪湖の近くにある神社で信仰も相当厚いらしい、かなりの人が出入りしている。

俺は今諏訪湖にボートを浮かべて神社の様子を双眼鏡で見ていると

ころだ。

少なくともこの神社に戦乱の兆しは微塵も見えない。
みんな幸せそうにしている。

神に欲って言うのがあるのかねえ？

少なくともこういう神社ばかりなら信仰を得るために戦争はないだろう。

「じゃあそろそろ神社の中の探索と洒落込みましようかね」

一応整備された土の道路を歩く。

そしてたくさん階段があるところについた。

「こりゃあ・・・なかなかの段数の多さだな」

階段を目の前にして面倒くさくなってきたがここまできて帰るのもあれだと思ってつかつかと階段を登った。

く移動中く

「ふうやっとなつたか」

何段でもありそうな階段がやっとなつた。

こりゃあ参拝する前に階段から落ちて死ねるな。

境内もかなりの盛況であるお守りとかおみくじは大人気のようだ。

「まあ時代が時代だからなあ・・・」

娯楽のない時代ってのは結構暇なもんだ。

現代人の忙しい原因は娯楽ではないみたいだが。

社会形勢の問題だからな・・・こればかりはどうも変えようがない。流行っているのは簡単に操れるもんじゃないのさ。

80年代が古いつて言われる時代は20年できた。そんなもんさ。寿命の短い人間の流行の変え方は色々すごいよ。

「しかし大社って言うだけのことはあるなあかなり大きい」

多分中には入れるんだろう。しかし大きいな。

さすが神を奉っているところといったところか。

巫女さん？も結構多いみたいだし。

その時だった！！

「なんだあの白い霊的なものは」

まるでオタマジャクシ見たいな白い塊が俺めがけて突っ込んでくる。

当たったら気分的にいやなのでひらりとかわす。

なぜか数が増えている。

ここで消音銃の出番だ。

ピュンピュンとまるでおもちゃのような音を出す、白い塊は散っていった。

音はへなちょこだが少なくとも当たったら原型を維持できると思わないが。

「ふー奇っ怪やな。妖怪のほうはまだかわいいな」

現実には小説より奇なりっていうのはこういうことなんだろうか？

「貴様何者だ！」

やけに威厳のこもった声が聞こえたのでそちらの方向を向いてみると・・・そこには幼女がたっていた。

まあ間違いないこの神社の神様なんだろうが。

「あー自分佐々木彼方いうもんなんですけど、ここの神社に興味があつてちよいと拝見しにきたんですわ」

なんか話し方が変やな。

「（。Д。）」

え、なにその驚いた顔は。

一般人を見てその態度はないな。

「どうしたん？」

「名前、もう一回いつてくれない？」

「佐々木彼方ですがそれがどないしました？」

そういうと神はorzになった。

原因がわからんけど俺の名前か名字になにかあつたみたいだ。

っは！まさか銃を出したからか！？それはないか。

第一そうならさっき反応してるよな。いまさら反応したなら相当だぜ…………？

「本当に佐々木彼方って名前なんだよね!？」

「はあそうですけども・・・」

俺の名前ってそこまで奇抜なんだろうか・・・今度は俺がorzする。

自分の名前で驚かれたら普通にショックだ・・・。

「はあ最初から喧嘩なんかでいくんじゃなかったよ・・・」

幼女（神）はなにかを反省しているようだ。

「佐々木彼方って名前はそんなにアレですかね？」

理由を知るには聞くのが一番と思った俺は思い切って聞いてみた。これで結構ひどい返答がきそうだからちよつと腹くくりました。

「佐々木彼方といえはこくら辺じゃ有名だよ。大昔に妖怪を消し飛ばして言うことを聞かせ、大和の神々にすら恐れられてるんだから」

「えー。それは酷い」

「全部自分でしてきたことでしょ」

情報の伝達は大事だぜ？

「1つ抜けてるところがある。神を消してるってところだ」

「ますます有名になりそうだね」

「orz」

普通の生活をしようと思えば思うほど普通から離れてる気がする…

…。

やっぱり俺には普通の生活は無理なんだろうか……。

「それにしても……一体なにしにきたのさ」

「大和連中がここに攻めてくるらしい情報を手に入れたからまあ視察しにきたってことだな」

「見ての通り平和だよー」

というかこの神、やけにフランクである。

いいのかなそういうので……。

「特に小規模戦闘も無しと……」

一応報告書を書かないといけないので、注意点、留意点を一応書いておく。

「大和の連中のせいで近くの村には被害が出てる」

「死人は出てなかったと思うけど……?」

「そりゃあここはな。でもこっちは現に妖怪と人間合わせて853は死んでるんだ」

「なんで妖怪も数に入ってるの?」

「それは話すと長くなるが……それでもいい?」

「また今度に……」

仕方ないね。

今日知り合ったのにいきなり民主主義の話しをしても仕方ないし、元々この時代民主主義なんてないしなあ……。

色々と話すと面倒なので、まあ聞いてくれないほうが助かるんだが。

「聞き捨てならないのが大和が攻めてきそうってところだね」

さっきの威厳が戻ってきたのか、声に気迫がこもっている。

「まああくまで攻めてきそうな兆候ですがね」

情報部はそう言ってたらしい。

無線機じゃなく手信号だったらしいし、もしかしたら途中で間違った伝わり方をしたかもしれないが。

俺がそう考えていると神（幼女）は顎に手を当て何かをブツブツ喋っている。

防衛策とか考えてるのかもな。

ピピピピ

なにかの連絡みたいだ。

しかし無線機じゃなく携帯を使ってくるってどういうことなの……？

「はい、もしもし佐々木です」

携帯電話なのになぜか名字を言ってしまうのはもうくせだから諦めるしかない。

後日本人だからあることだが、電話をしながら頭を下げたりするのはもはや習慣だ。

こりゃあ昔からの日本のわびさび精神云々なのかもしれない。
まあそのことはいいとして今は電話とにらめっこでもしようか。

「大統領、今のところ大和軍勢に動きはありません」

「了解。兵士は疲れてないか？」

「元気が有り余ってる感じですね」

「いつも通りならいいんだ。じゃ切るぞ」

「はいわかりました」

ツプ

ぶっちゃけこの携帯電話電波1本でぎりぎりつながってる状態だ。
圏外になることも珍しくない。電波塔もさすがに足りないか。

「誰と話してたの……？」

いかん（このドン引きは）危ない危ない危ない……。

しかし他からみたらあれだよな1人空気に話しかけてるように見えるよな。

しかも携帯がない時代だからなおさらな。

「あゝ霊力を使って念波を飛ばして話してました」

こういうことを言っても別に変じゃないからすごいよなこの世界（
笑）

「そんなに霊力があるわけじゃないみたいだけど？」

「誰でも使えるのがコンセプトですから」

「こ、こんせぷと？」

そういえばこの時代の生き物全般にカタカナ語＋外来語＋現代語って通じないんだった・・・。

「誰でも使えるのが売りですから」

「そうなんだ・・・」

と、とうの神は理解していないご様子。

まあ知らない言葉で話せても困るよなあ。

「思ったんだが、信仰っていうのは戦争してまで欲しいものなのかな？」

「大和の神々は欲しいと思ってるのかな」

とりあえず信仰があると奇跡？まあ非科学的な現象がよりできるようになるらしい。

神力というものを教えてもらった。

ないと消える、らしい。

なかなかシビアな世界だな。

神でさえ現実には勝てないのかねえ。

現実の力ばねえす。

「俺にも信仰ってあるのかな？」

「ちょっとあるね」

感謝はよくされるが信仰される覚えはないぞ。

「農具の神とかいるんだろうか・・・」

「農具・・・ってもしかして鉄製？」

農具は鉄製じゃなくてだな。

「鉄は錆びるからな・・・」

「錆びる？」

「酸化、なんて言ってもわからんだろうしなあ」

学校には通ってなかったがそれなりの知識は持ってる。
まあこの程度なら常識なのかもしれないが。

「まあ、使い物にならなくなるってことだ」

「でも鉄が一番新しいのに……」

「この時代に俺がいなかったら、鉄か、最強だろうな。でも残念なことに俺がいる。そのせいで鉄は最強じゃなくなった」

原因そのものじゃないか……orz

「発展した国があるって聞いたけどもしかしてその国の人？」

「名目上は1番上になるかな……」

まあ降ろそうと思えば降ろせるし、第一大統領だからって発言力があるわけでもないし、仕事は多いけど。
俺なんで大統領やってるんだろ？

帰ったら選挙やって辞任しようかな？
選挙やって辞任ってなんかおかしいな。
辞任じゃなくて落選か。

「やっぱり……民主主義とかってやつだね？」

「まあそうですねえ」

「民主主義ってなに？」

どこから仕入れた情報なんだろう？
さすがに神ともなると情報網がすごいのかもしれない。
いや知らないんだけどさ。
でも普通の人よりは広いと思う。

「まあ字のとおりかな。民が国をつくる的なね」

「じゃあ私たちは何主義？」

なんって答えればいいんだろうな……。
うーんあれかなあ？

「独裁主義かな」

「独裁主義？」

「あゝあんまりよくはないと思う。でもこの時代では主流かな」

「民主主義はこの時代の主義じゃないんだ？」

「だねえ。未来のやつだからなあ」

なんか微妙な顔をしている。

神様なのに科学的に証明できないといけなとか言わないよね？

「未来ねえ・・・」

「未来からきた人が言うんだから間違いない」

「えー・・・ないわー」

（批判が）おゝ激しい（＾ω＾）

「ああん！？神最近だらしねえな！？ああん！？卑猥かあ！？」

「おゝ激しい（＾ω＾）」

「歪みねえな」

いつの間にか哲学♂的会話になってたね仕方ないね。

「まあ文明が発展してる理由がよくわかったよ」

「そうかい？じゃあ俺は帰るかな」

「そう簡単には帰せないなあ」

バトルの予感やな……!?

「一応神にも面子があるんだよねえ」

「じゃあどうするんですか？」

逃げる準備をしなければな・・・まあ準備完了してるんだが。

「不本意だけど戦ってもらうしかないねえ」

「ふふ俺も舐められたもんだな。まさか俺の逃げ足に追いつける
とっていたのか？」

「……え？」

諏訪子がそう声をあげたときはそこに奴はいなかった。

「?何だったんだろう今のは……?」

まさか狐に化かされでもした?

諏訪子はさっきまでそこに奴がいたであろう場所を見つめる。

しっかり足跡は残っている。

————やはりあの出来事は本当だったのだ。

彼は逃げ足に追いつけるかと言っていたが、あれを走っていったのだとしたら、相当の速さだ。

神を前にしてあの余裕だった理由も頷ける。

なににせよ戦わないで済んでなによりだと思う。

本気を出せば私なんか簡単に消される可能性もあるし。

・
・
・
・
・

—————「ふう」

俺は今諏訪湖から南に10kmの地点にいる。

もちろんあの神から逃げてきたところだ。

名前・・・聞いてなかったな。

まあそんなことはいいか。

取り合えず回収してもらわなければ。

《こちらネイチャー1、着陸地点についた。急いで脱出用のヘリを
よこしてくれ。どうぞ》

《了解。数分でそちらにつきます》

昔はヘリなんざ飛ばせば行方不明になるのが落ちだったが今は氣候
も安定してきて大丈夫になった。

まあ現代レベルの技術だから大昔の氣候には勝てなかったわけさね。
そんなこんなで帰ってきたわけだ。

「それで大統領首尾は？」

報告書を渡す。

「まあ平和だな……表面上は」

「そうですか……西岡参謀と話をします」

「ほいほい」

神気の高まり……そろそろか……きっとこれは神の戦国時代ってことなんだろうなあ……。

わが国の歴史書に記す必要があるな。

また報告書からなにやらまで書かないといけないのか……参ったな。あんまり戦争をしてもらうと俺が書く書類が増える。

運が悪いことに一番長生きの俺に仕事が回ってくる。

処理能力の問題らしい。前の世界で軍人だったのが禍したな。

この2ヶ月後について始まる。あの歴史に残る大戦が。

〜第四話〜へいへい、幼女(神)だ悪かねえぜ(後書き)

更新速度が落ちる！？ま、まさかそんなことがあるうはずがござい
ません。と言ったなあれは嘘だ。

ちよ！やめ！あああああああああ・・・

く第五話く何が始まるんです!？ 諏訪大戦だ! (前書き)

うーん話がい付かない……

〈第五話〉何が始まるんです！？ 諏訪大戦だ！

西暦302年 8月 28日 午後13時23分開戦 のちの人はこの戦いを諏訪大戦と呼ぶ。 佐々木彼方著

8月下旬大和勢力は動き出した。

まさしく私利私欲であろう戦いを始めようとしているのだ。

「総司令官！総員配置につきました！」

「大和連中がこちらに攻撃してくるまで絶対に攻撃するんじゃないぞ！あくまでも村民の救出が最優先事項だ」

「っは！」

まあ早い時期から避難勧告は出してるんだが、なかなか自分の土地を離れようとする者が少なくて困った。

神同士の戦いだ。

人なんざ簡単に死ぬし、妖怪だって消える可能性はかなり高い。

「よし諏訪大社を見張って来る」

「はっ！くれぐれもお気をつけて」

〈諏訪大社 諏訪子side〉

やばい非常にやばい。

なにがやばいのかというと大和の神々が攻めてきたことだ。

主に神数的にまずい。

「<●><●>」

何か気配を感じる。

恐る恐る振り返ってみると・・・そこには数ヶ月前に出会った彼がいた。

「やあ久しぶり」

「うん久しぶり・・・じゃなくて！何でここにいるの!？」

今大変なのに・・・。

「忙しいところすいませんね。大和の連中が攻めてくるんでしょう？」

「うんまあ・・・」

知っているということは何をしにきたのだろうか・・・まさか大和の神々と私もろとも消そうとでもしているのだろうか。
彼の表情を見る限りなんの変化も見当たらないけど・・・。

「この戦いの記録を書きに来たんですよ」

書きにきた・・・？

神の戦いを見るというのか・・・ありえない、と言っても彼は私より年上だし・・・。

なんにせよありえないことじゃない。

「危ないけどそれでもいいの?」

「神なんかやられてやるほど俺は優しくないぜ。向かってくるなら消すそれだけだ」

「そういうことなら・・・というか私より長生きな時点で逆らえないんだけどね・・・」

歳の差。まあ数年ならいいけど億なんて年月の違いじゃさすがに逆らえないしねえ。

「言いたいことは言えばいい。歳をとってるから正しいことを言うとは限らないぞ。まああなたも人間的に若いとは言えないだろうが。妖怪も数千年なら普通は大妖怪なんだが・・・神は信仰の量らしいからな」

経験の量が違うのは確かなのに特に威張るわけでもない彼の・・・いや目の前にいる佐々木彼方は何を見てきたのだろう。ただ単にバカなのかもしれないけど・・・。

（彼方 side）

「ふうついたか」

この前神社の地図を書いておいたのが役に立ったようだ。

さてこの神社の神様の背後にきたわけだが・・・。

俺に気づかないってことはさすがの神様も大和連中にお手上げってところか。

兵法の基本は兵力で相手国を上回るだっかな？

兵法は相手に兵力が勝っていることを前提としてるわけだし、悩む

のも無理ないか。

しかしここまで深刻に考えると相当だな。

まさか信仰争いなのに村民大虐殺とか始まらないよな？

そうなたらさすがに黙ってられないな。

トマホーク巡航ミサイルでもお見舞いしてやるしか方法はなくなっちまうな。

まあ大空襲でもいいんだが。MIG-29でも飛ばして神社攻撃か、AC-130の110mmで攻撃もありか・・・。

おおっとそんなことはどうでもいいんだよ。

とにかく驚かさないように目の前の神に気づいてもらわねば。

「<●><●>」

これは余裕でビビる。

プーチン首相とかにやられたらたまったもんじゃないな。

多分この攻撃をできるのは一部の人だけだろう。

人間って時々妖怪よりも恐ろしくなるときがあるからな。

おー怖い怖い。

「やあ久しぶり」

「うん久しぶり・・・じゃなくて！何でここにいるの！？」

ノリツツコミとはなかなかやるな・・・。

「忙しいところすいませんね。大和の連中が攻めてくるんでしょう？」

「うんまあ・・・」

歯切れが悪いやはり戦局は客観的にみて非常に不利なのだろう。
しかもこの顔打開策はないと見える。
神様も戦争になると忙しいのかねえ。

「この戦いの記録を書きにきたんですよ」

そういうと愕然とした表情をする神。

まあ普通はこんなことしないだろうけど歴史を直に感じてるからやつぱり後世に残していききたいわけよ。

「危ないけどそれでもいいの？」

「神なんかにやられてやるほど俺は優しくないぜ。向かってくるなら消すそれだけだ」

「そういうことなら・・・というか私より長生きな時点で逆らえないんだけどね・・・」

長生きだと逆らえないの意味がいまいちわからん歳なんざ関係ないと思うが・・・。

「言いたいことは言えればいい。歳をとってるから正しいことを言うとは限らないぞ。まああなたも人間的に若いとは言えないだろうが。妖怪も数千年なら普通は大妖怪なんだが・・・神は信仰の量らしいからな」

神は微妙な顔をしている。

半分バカにしたような感じの顔だ。

「なにその顔。バカにしとるやろ？」

「いや別にそんなことは・・・ないと思う」

自分のことなのに曖昧ってどういうことなの・・・？
そうかこの神だらしねえのか。

「さてそろそろくるか・・・」

「何が？」

「そりゃあ敵さんさ」

神気とでも言えがいいのだろうかものすごい気が近づいてくる。
ふう念のために地対空ミサイルを持ってきて助かったぜ。

《β2から本部へ大和勢に動きあり。繰り返します大和勢に動きあり》

《こちら本部攻撃はするな。相手側も攻撃はしてこないはずだ。負傷者と住民の救助のみやるんだ。わかったな？》

《了解作戦を実行します》

《こちらアパッチ20。かなりの数だこいつはでかい戦争になるぞうだどうぞ》

《こちら本部30分ごとに逐次戦況を報告しろ》

《了解偵察任務を続行する》

《こちら戦艦武蔵目標の座標を教えてください。いざというときのために砲撃支援の準備をしておく》

《了解後ほど伝える現在は待機だ》

《了解》

《こちら榴弾部隊位置についた目標を視認。距離12000m射程距離内。弾幕砲撃の準備をする》

《部隊が攻撃されるようなら砲撃をして構わない》

《了解。よし準備をしろ！》

無線がいきなり騒がしくなってきた。
やはりやつらがきてるな。

「いよいよか・・・」

さすがの神もカリスマを醸し出している。
さていくら潰せるかねえ。

普通に考えて目視できる距離じゃないが俺だってカカシじゃない、
地对空ミサイルくらいは当てるさ。

たかが2、3kmだ。これで当てなきゃ俺も歳だなw

標準に神を入れる。

シュパン！

みように気持ちのいい音を立てて飛んで行った物は見事に神に着弾

した。

「!？」

近くにいた神がなにか言葉を発したいようだが残念ながら発音できてない。

きっと地対空ミサイルにビビったんだな。

——安心しろ鉄よりは柔らかいから。

《地対空ミサイルの着弾を確認。司令官殿が発射したようです》

《了解。連中は司令官にまかせておこう。村の北側に負傷した奴が3人いるぞ急行しろ!》

《了解しました!》

「もう一発!」

俺も笑っちゃったよ。

地対空ミサイルで神が消え去るとはね。

神もさすがに高度を下げたがそれでもまだ高い。
無残にも撃墜されていく。

「……何が起こってるの？」

神が分からないような現象が起きてるならこの地対空ミサイルをつくった未来の人は天才だな。

「よし移動だ」

隣の神も鉄の輪を持っている。

投げて使うんだろうか？まあそれが普通か。

しかし銅の剣が主流の時代に鉄とはね・・・しかし鉄の時代の終わ
りも数千年でやってくるのさ。

時代は変わるもんだな。

しみじみと思うことだ。

さてうってかわってここは平地まあ平原と言ったほうがいいか。

とにかく見晴らしがよく凸凹があるわけでもない本物の平原だ。

まあぶっちゃければ榴弾砲支援、航空支援、海上支援すべて使いや
すいというところだ。

伏兵も仕掛けられないしな。

「さていきますか」

「はあ、あんなにたくさん……」

神が意気消沈してる。

「もうちょっと元気だしてくださいよお。今数を減らしますから」

《俺だ聞こえるか》

無線を使ったってことはどうなるかはだいたい予想がついたはずだ。
この平地にはすまないが焼け野原になってもらう。

《はいなんでしょう？》

《支援可能なユニットにレーザーマーカーで指定したところを全力
で攻撃してくれ頼む》

《了解。準備に1分ください》

「あーうー」

「さて派手なドンパチを見物と洒落込むか」

「え？ どういうこと『バーン』！？」

さすがに神も目を見張っている。

目前の神たちに何かが降ってきているのだから。

そうあらゆる支援攻撃をしたために神を消すどころかそこらの地形までかえてしまったのだ。

「さていくら生きてるかな」

「……」

神、諏訪子は恐怖を覚えた。

もし自分があっち側にいたなら……あの怒れる矢の雨をなすすべもなく喰らっていたのであろう。

そう思うと思わず身震いした。

そして隣にいる人間はそれをさも当然のように見ているのだ。

——やはり経験の差がありすぎる。

きつとありえない神気をぶつけられても平気な顔しているのだろう。そしてあくまでも自分とお前は対等だという態度をとるのだろう。

「やっぱり敵に回さなくてよかったよ」

祟りなんてたいしたこととは思えないほどなのだもし相手にしてい

たら恐ろしいのだろう。

「ほーさすが神ってところかいくらか生き残りがいるな」

「あ……」

さっきまで数百いた神はどこかに消え、もう数えるほどしか残っていないのだ。

「さあここからは俺の出る幕じゃない。神と正面きって殴り合いなんていやだからな」

ここまでやっておいて何を言うかーと諏訪子は思ったが、さすがにすべて任せきりにするわけにもいかなーかと思ひその数えるほどの大和の連中のところに向かったのである。

「気をつけてな」

「負けるはずかないよ!」

「そりゃあ頼もしいな」

頼もしい…けどよ、現実を見ればどう考えも力量に差がある。

たとえばあの神が鉄の輪を持っていたもたいした攻撃力にはならないのだろう。

つまりこの戦いは結果が見えてるってことだ残念なことにな。

遠くから見てるからわからんけどどうやら一騎打ちになったみたいだな。

陸で斬り合ってた連中も動きをやめて上を見ている。

さっきの支援に気づいていなかったのか、それとも恐ろしいほど冷静なのか、パニックになりすぎて逆に冷静なのかよくわからないが、とにかくよく訓練された兵士達だ。

現代に例えればグリーンベレーレベルだ。

ドーン！

爆発音が聞こえる。

破片だのが飛び散って怪我してる連中も大勢でているようだ。

《こちら彼方至急救急へりをよこしてくれ。神の戦いに巻き込まれてかなりの負傷がでている。すぐによこしてくれ！》

《既に1個師団が向かっています》

《了解。待機する》

近くで怪我をした連中を見に行く。

「おい大丈夫か！」

「…あ……あ」

「しっかりするんだ！すぐに助けがくる！」

腕からの出血が酷い。このままだと30分もたたないうちに出血多量で死んでしまう！

「しっかりしろ！よし血は止まったぞ。意識があったら、手を握ってみろ」

弱々しくだが手を握っている。

「よし動くんじゃないぞ。ジツとしてるんだいいな？」

「誰かこっちに来てくれ！」

「どうした！？」

かなりといっても数万人規模ださすがに俺でも全員は助けられない。

「体に木の破片が刺さったんだ！」

「そいつを抜くんじゃない！出血多量で死ぬぞ！意識はあるなよし」

「こいつは助かるのか？」

「助かるんじゃないかって助けるんだ！こっちを抑えろ！」

「は、はい」

《救援要請区域についたこいつは酷いすぐに脱出ようの車両か、ヘリを用意してくれ！》

《了解しました。2分でそちらにつきます》

「くそお…」

「喋るな！死にたいのか！まだ死にたくないだろ！？何も喋るな！」

ふと空に目をやると神の鉄の輪が緑のツタみたいなので錆びているところだった。

やはり勝てなかったか……にしてもなぜ他の神供はこいつらを助けない！？

「く……」

「おいしっかりしろ！こんなところで死ぬんじゃない！」

「司令官！救援にきました！」

「こいつを頼む！かなりの重傷だ！おいお前！」

「はい！」

「怪我がないならこいつらを運ぶのを手伝ってくれ！」

「わかりました！」

《見ろよ砲撃されたところの地形が変わってるぜ》

《ああ、恐ろしいな陸海空からの砲撃だったみたいだからな》

結局この戦いは半日とたたずに、終わった。

死者1276名、負傷者16723名、生存235名という結果に終わった。

神が手に入れたかったものは信仰。しかし信仰する人々を傷つけてしまったらどうなるだろうか？

信仰と畏れは違う。力で押し付けるのは死体を増やすだけだ。

まあ明日にでも神に離しを聞きましょうか。

（翌日）

「昨日は大変でしたねー」

「あーうー見事に負けたよ…」

「おおこちらが大和の神様ですか？」

「まあそうなるけど…なんで普通に神社に入ってきてるの？」

「そりゃあ神なんて気にしないし」

「まあ勝負には勝ったからいいけどねえ」

「あーうー悔しいよお」

「勝負に負けたんだからしゃあないやろ。まあ信仰が増えるかは微妙なところですがね」

人も無意識に神などの存在を忘れていったのだろう。神に頼らなくても生きていけるようになったってことだ。

「微妙…？」

「昨日の戦争で死人も出てますし、怪我人も続出してます。傷が酷すぎてやむなく腕や足を切断した奴もいる。少なくとも、戦争を起こした連中は歓迎されないだろうな」

「どおりで村に人がすくなくないと思ったよ」

「それじゃあ信仰の増加は期待できない？」

「そもそもこの時代よそ者を受け入れてくれるかわからんがね。しかも信仰する神様をそこそこ変えるかね？いくら人が損得勘定で動くとしてもそれはないと思うぞ」

「orz」

落ち込むのも分からなくもない。

わざわざ犠牲を払ってまで信仰を得にきたのに現在のところそれが望めないのだからな。

まあ人がどういう行動をとるか理解できてないのが人と神の差だな。この先神が減んでいく理由もわかる気がする。

「では私はこのさきどうすれば…」

人に道を教える神様が人に道を聞いてどうするか！と言いたいところだが神様も結構大変ってことだな。

「信仰って横流しできないの？」

神から神に信仰送信できないことは無理…なのかなあ？

「そ、それだあ！」

「びびるわあ！」

「信仰の対象をすり替えるか…」

なんかOKっぽいな。

名前がなんたら〜といっているがつまり若干名前を変えるだけで信仰の対象を変えられるらしい。

理屈は全く理解できないが、両方納得してるなら問題はないか。

「ということで改めてよろしくね」

「そういえば名前知らんのだけど…」

「洩矢諏訪子だよ」

思うになんで名前聞かなかったのだろう。

にしても洩矢って名字は聞いたこともないな……多分その血筋の人しか受け継がない名字なんだろうな。

簡単な例が織田とかだな。

「まあ一応自己紹介しておくか。改めて佐々木彼方だ。ただの人間な」

「ただの人間が神殺しなわけがない」

未来スタイルの神様が言う。

ていうか時代先取りしすぎだろ。

1600年後のスタイル取り入れるとかありえへんわあ。

うーん時代を無視してるよなあ。

「神消したのは俺じゃあなくて諏訪子だよ」

「嘘言わないでよ！」

別にいいと思うけどなー。

神を殺れるほどの実力を持つてると皆が知れば信仰も増えると思うんだが……？

「嘘じゃないよー」

「あーうー」

「わざわざ嘘をつく理由でもあるのかい？」

「まあ自国周辺に変な圧力かけたくないし、一応これでも国民を守る義務があるからさ、仕方ないね」

「仕方ないって……」

諏訪子が納得してなさそうな顔だが神殺しの汚名（？）は着てもらう！

「でももしかしたら名前が上がるかもしれませんよ？」

「うっ……」

そうだ悩め！悩んだあげくその名前を受け継ぐ（？）のだ！

「引き受けてやったら？諏訪子」

「うーだってそうだったらまた神を殺したときどうなるのさ？」

「引き受ける……ことになるね」

なにかまた白い物を飛ばしてくる。
それを消音銃で撃ち落とす。

「あ、そういやそっちの神さんの名前聞いてなかったな」

「八坂神奈子だ。よろしく」

「よろしくお願いします」

「無視しないでよ！」

「いやあすいませーん（棒）」

「崇れないし、神は殺すしなんなの？」

涙目になりながら言ってくる諏訪子。

「というかあの白いに当たると崇られるのか？
知らなかったな……。」

「まあ変人ってやつですね。一応人間の枠からはみ出してないの
で」

「絶対嘘だ……」

「傷つくなあ」

俺が人間の枠を越えてないのは確認済みだ。
信じてくれるかはまた別の話だが。

まあいいだろう。今更名前がどうなったってぎゃあぎゃあ騒ぐ歳で

もないしな。

「じゃあそろそろ帰りますかね。報告書も山ほど書かなきゃなりませんし」

「中々忙しいみたいだね」

「まあ一応偉い方ですから、最低限、仕事はしっかりやらないとね」

「頑張ってね」

「私達も仕事に取り掛かろうか……はあ」

神様も大変なんやな……ヤス。

俺も少しずつ甘くなってきたな。

く第五話く何が始まるんです!？ 諏訪大戦だ! (後書き)

とうしろうだから駄文なのは仕方ないね。

だらしねえし……。

ゝ第六話ゝただの会話ですなあ全くお笑いだ（前書き）

今回はかなり短いですすいませんへへ；

〈第六話〉ただの会話ですなあ全くお笑いだ

あの戦争が終わって後始末やら破壊された家の立て直しやら忙しかったが、それでも1年経った。

「助けてよー彼方ー」

まあ諏訪子のところにくるたびにこれなんだが……。

「また儀式ですか？」

「諏訪子より私の方が忙しいけどね」

「忙しいうちに神力？を溜めておいた方がいいですよ」

「私らも廃れる時代がくるってことね……はあ」

この程度で疲れたとか現代人もっとハードな生活送ってるよ自分を何様だと思ってるんだ。

あ、神様かw

「第一俺より仕事量少なくせして疲れたとか助けてとか最近たるんでるんじゃないのか？」

「そんなことないもーん」

「はあ、一緒にされると凹むから止めてほしいね……」

神奈子さんがなんかいつてらあ。

でも甘い処理能力なら俺より上はいっぱいいるんだよ。
光並のはやさで書類を片付けていく化け物がね……。

「だからって俺が代わりに儀式に出たらそれこそ存在意義、根本から大変なことになるぞ？」

「大丈夫なんじゃない？」

この幼女神は俺の話をまともに聞く気はないらしい。
でも話を聞くときはせめて座ろうぜ。

「神奈子さんの方は信仰が順調で？」

「ん、まあそれなりってところだと思うけどね……」

「まあ簡単に転がり込んでくるもんじゃないですからね。信頼とか信仰を得るのは同じ位大変ってことですよ」

信仰の力っていまいち実感沸かないからわからないんだけど。

「最近また妖怪の力が増してきたようだし……」

「追い払うの大変なんだよね」

「昔からこの時期はピリピリするのが当然さ。なにせ次期選挙の時期だからね」

「選挙？」

この時代にそんなものあるわけがないからな……どう説明すればい

いかな。

「まあ言葉の戦争ですかね。それで一番人気な人がその仕事につけるってやつです」

「よくわからないけどそれも近代政治とかってやつかい？」

「まあそうですね」

「そういえばさ彼方はなんで国をつくったのさ？」

「最初は国なんかじゃなかったが……知らないうちに時間が過ぎてていつの間にか国になってたな」

まあ悪いことがあまりないから悪いことじゃなかったのかもしれないけどさ。

「さすが長寿の言うことは違うね」

「そういえば私たちよりも長生きだったね……」

「まあ長いと思っててもいつの間にか時間なんざ過ぎていくもんだよ。ただ結構いい生活はしてたと思うけどね」

あくびをしながら話す。

「時は金なり？」

「光陰矢の如しの方があってるかもね」

「神より長生きの人間、未来技術……大和の神々が驚くのも納得できる気がするよ」

「なにたかが数億年生きたところで何にも変わりはありませんよ。戦争で人間が発展していくっていう事実もね……」

「戦争は、嫌い？」

元軍人の俺がしかも数ヶ月前殺しをやった俺に聞くか？

「好きじゃないな。でも本当に仕方なくやるときはあるかもな。そう考えれば昔は俺ももっと危ない奴だったことだな……妖怪を殺したりしてたわけだし……」

でも本能的に楽しんでる可能性はあるな……人殺しが快感になってしまふともう終わりだが、俺はもうそこすら越えてるような気がする。

人殺しってレベルじゃないし。

周囲の神々から恐れられるほどの存在になっちゃった。
あんまり名前が広まるのも困るんだけどね……。

それでも普通に話してるこの神達はなんなんだろうな？

「神がゴロゴロしてるのは日本だけだろうな……」

「へえー外国にも神っているんだー」

「そりゃあいるよ大抵1人だけど」

「そうなのかい？外国とかいうところはよくわからないからねえ…

∴
」

「仕方ないね」

第一渡来人でも中国レベルだしなあ……。
アメリカもないしな……。

「さてお別れも済んだことだし、行くか！」

「今の会話のどこにお別れの言葉があつたのさ！」

「まあ落ち着け、崇りを向けられたらビビって話もできやしねえ。
大丈夫、一年に一回は戻ってくるから（多分）」

「本当に？」

「うん」

「本当の本当に？」

「うん」

「本当の本当の本当に？」

「くどいなあ、本当だって（多分）」

「神様に嘘つかないほうがいいよ？」

おっとここで脅迫だー！

「まあまあ諏訪子いかせてやりなよ。私達がどうこう言ってどうにかなる問題じゃないさ」

「うゝ絶対帰ってきたらここに寄ってよ！」

「了解。必ず戻ってくるよ」

西暦302年 11月28日。日本自由民主主義国一代目大統領佐々木彼方は二代目を高橋華たかやま なのはに任せ国外へ飛び出した。たとえどの立場でも自由なことは変わらないということを彼は改めて教えてくれたのだ。

第一師団妖兵部隊隊長、田中政吉たなか まさよし著

ゝ第六話ゝただの会話ですなあ全くお笑いだ（後書き）

更新はされていなかった俺を殺れ

く第七話く月人は全員殺すと約束したなあれは嘘だ（前書き）

更新速度orz

テストがあつたのは確かだけでも、若干ショックを受けた

第七話 月人は全員殺すと約束したなあれは嘘だ

時代が経つのは自然なことであり残酷なことだ。

そしてその残酷なことを知っているといるということはその時代の人間又は妖怪ではないのだ。

意味わかんねえよだって？

言ってる本人が1番わかってないから大丈夫だ。

とりあえず時代が過ぎるのは空しいことだなあってことさ。

それはそうと時代が進みました。

途中10年くらいして国に帰ったら、諏訪子に説教されたりしたけど、まあ平和だったな。

時代は710年、俺の記憶が正しければ奈良時代だ。

と言っても奈良時代が始まって1年目ではあるのだが。

まあここは都で結構な賑わいを見せている。

さすがに都というだけはあるが、俺はこんなところに住みたくなね。

いかにも金持ちしか住んじやいけないよー的な感じがするしさ……。腹がたつからこれから毎日都を焼こうぜ？

さてと都に潜入するに当たって必要な装備と言えはやっぱり時代にあった服だ。

さすがに現代の服で道を歩くわけにもいかないしな。

／デエエエエエン！／

よしじゃあ都をドン☆パチ賑やかにするか。

ドーン！

ってんなわけないだろうえ！

いくらなんでもいきなりそれはない。

第一そんなことしたら有名で名高い陰陽師に殺られる、と思う。でも陰陽師なんて霊力は使うしすぐ疲れるはろくなことがない。

ピストルよし手榴弾よし。

ないとは思うが念のために、な。

さて都を見て回るか！。

（数時間後）

やっぱりな。陰陽師がうろうろしてやがる。

検非違使（警察みたいな組織）よりも恐れぜ……。

妖怪じゃないからとかそういう意味の恐さじゃなくて普通に殺しとかやりそうで恐い。

しかし術を唱えるのに少し時間がかかるらしい。

つまり戦闘になっても勝てるはず（理論上は）

まあ安倍晴明みたいな化け物がきたならRPG7を使わざるをえない。

戦うのを前提にしてる俺が言うのも何なんだがW

まあ無益な争いと殺生は後免だな。

まあそんなトラブルに巻き込まれるようならすぐ逃げるけどな。

まあ同時期噂になってたのが風見幽香とかいう恐ろしい妖怪だ。

向日葵畑に住んでいて荒らしたり強い奴がいるといたぶってから殺す（食べてるのかもな）らしい。

そして俺はその危険区域（DEAD ZONE）っていう表現のほうがわかりやすいかも）を地図に書き込んで印をつけておいた。

陰陽師が何人も出ているらしいが誰も戻ってきてないらしい。というかこの時代に向日葵があること自体不思議だよな……まあ暇があったら見に行ってみるか。

さすがは元の都といったところでかなり賑わってはいるのだが……最近やけにピリピリしてる。

嫉妬の類の感じだな。

まあ都には美しい姫がいて一目見たいと各地から旅人がかなりきてるらしいからな。

しかし名前を聞くかぎりかぐや姫ってあれだよな竹取物語のかぐや姫だよな？

ということは月に帰るのか……月の住人は殺らなきゃいけないんだったな。

約束は約束だ恨まないでくれよ、月人さんよお。

そうと決まれば早速館に侵入だ。

この時代はサーモグラフィも暗視ゴーグル（昼だが）もなくていいよなあ。

ダンボールがあれば大丈夫（大丈夫じゃないな絶対に）と友人は言っていたが、多分先に頭が逝ってるんだろうな現代戦はどうだか知らないが（現代戦でも怪しいが）少なくともこの時代はOUTだよな。というかまずダンボールは持ち歩くもんじゃないし。

まあそんな友人への愚痴は置いておいて館につきました。

結構広いなだね。仕方ないね。

竹取の仕事今でも続けてるんだろうか？こんなに金があるのに。でも年をとったら、いやこの時代は娯楽が少ないからどの世代でもあんまり変わらないか。

失礼かもしれんけど。

「さあて至高のかぐや姫の顔を拝ませてもらうか」

襖もしっかり開いててかなり開放的だが塀が高くて覗くのは無理だろう。

俺は内側にいるから関係ないけどね。

「おお！確かにありや美人だあ」

襖の奥から見えたのは黒髪に整った顔立ちまさに美人である。

化粧をしたわけでもないのにあの姿はすごいなあ。

さっきから恨めしい顔で空を見てるのが気になるがそこはまあいいだろう。

しかし……かぐや姫の部屋のまわりは警備が0だ。

やっぱり1人になりたいんだろうな。

都のお偉いさん方が求婚しまくってるそうだ。

その間に愛というものがあるとは到底思えないが。

欲は権力に比例するとは言いが、そこまで露骨だとさすがに引くな。この時代で名声は相当大事なんだろうがそこまでして欲しいかねえ。まあ今も昔も偉い連中の考えてることはよくわからんな。

「はあ……」

あの綺麗な顔でため息なんかついたら男もコロツといっちゃまうだろうな。

しかしそこまで深刻な問題って感じだな。

有名人の辛いところだな。

まあ名前にかなり目をつけられてる俺よりはマシかw（佐々木彼方の名前を出すのも危ないレベル）

「なにか……?」

かぐや姫がこっちをジッと見てくる。

多分カモフラージュが怪しく見えたのだろう。

極力動かないようにして息をとめて、気配も抑えた。

<○><○>

凝視してきとる!

いかん危ない危ない危ない……。

「気のせいかしらね?」

ふふふ、やはり俺は見つけられなかったか。

「なんか視線を感じるのよね」

チラッとこっちを見てくる。

もしかしてばれてるのか?

だとしたら俺は馬鹿なことをやってることになる。

でもばれてない感じもするなあ。

「あなたなにやってるの?」

ばれてたorz。

「大丈夫と思ったらやっぱりダメだったかあ。やっぱりあれは迷彩効果ないね」

ダンボールを指差す。

「まずそれに隠れて大丈夫だとよく思ったわね」

「友人が真面目な顔で言うから実地試験をしたわけですよ」

「それで私は大声を上げればいいのかしら？」

よく考えたら俺は侵入者だった。

気付くのが遅いが大丈夫か？

大丈夫じゃない問題だ。

「できればやめてほしいなあ」

「まあいいわ暇だったし話し相手をしてちょうだい」

暇、なんだ……。

とかイメーজと結構違うな。

もっと人を寄せつけない感じだと思ったら以外にいい感じだった。

やっぱり外見だけじゃ、妖怪も人間もわからないな。

「まあ俺も調度暇だから別にいいですよ」

「まずあなたなにをしにきたの？」

「巷で有名なかくや姫の顔でも拝んでおこうかな〜と思って」

さすが有名だ。やっぱりカリスマとでも言えればいいのかそういうのがあるよな〜

「それで見た感想は？」

「純粹に綺麗とは思ったね。でもそれだけかな」

「結構はつきり言うのね」

「そりゃあ嘘を言うほど優しくないし、第一嘘ついてもどうしようもないだろ」

「それもそうかしらね。でも始めてよ。私に見とれない人がいるのは」

「外見で好きになるなんてのは安い恋さ。一目惚れとはまた違うものだからな」

「まるで経験があるみたいな口ぶりね」

「俺の友人の話だからなあ。まあ恋は真剣になってところだな」

結婚とかは人生に関わることだしなあ。

まあ俺がこの先結婚することはまずないが。

まず結婚相手がいないしねえ。

「それにしてもよくあれだけの警備をくぐり抜けられたわね」

壁に警備員がいるわけないしなあ。

「まあ壁を飛び越えてきたからな……」

「はあ!？」

普通の反応でよかった。

人妖部隊の連中はこれを言われてもなんとも思わないからな。新鮮です本当にありがとうございました。

「確認していいかしら？」

「いいですよ」

「人間よね？」

「当然ですとも。人間でも訓練を受けていればあれくらいの塀はどうということはありません」

あれくらいの塀は泥棒対策になってない。
覗き対策にはなっているが。

「俺が山賊、盗賊の類だったら危なかったですよ」

「あなたはそういう類ではないのね」

山賊、海賊、は性にあわない。

まあ盗賊なら結構やれなくもないんだが。

こう見えても盗むのは得意さ。

「でもあなた凶器を持っているようには見えないわ」

「そりゃあわざわざ相手に自分の手の内は教えないさ。何があるかわからないからな」

「じゃあ気をつけたほうがいいのかしらねお互い」

かぐやはふふっと笑って外を見ている。

「おおそうだ。自己紹介を忘れてたな俺の名前は……あー偽名使ってもいいかな？」

「あなた検非違使にでも目をつけられてるの？」

「そういうわけじゃないんだけど色々出会った人その他諸々にこの名前をだすと驚かれるからさちよっと嫌なんだよね……」

まあ正直に喋る必要があったかどうかは怪しいがたまには本当のことを言っても問題あるまい。

「その服さ……暑くないかい？」

そう季節は夏。昔と言っても扇風機たクーラーがあるわけじゃないせいかかなり暑い。

誰でも何人か熱中症になっていた。

妖怪も参ってるのか草むらでダレてる連中が多い。

「あるものを使ってるから全然暑くないわ」

「ずるいぜえー。こんな日はかき氷でも食べたいがそんなものないしなあ」

「かき氷？」

「ああ夏の風物詩と言っているいいほどの食べ物だ。祭りがあつたらかき氷みたいな感じだからな」

「私も食べたいわ。さすがに暑いもの」

まあ服の中は涼しくても顔とか手は暑そうだなあ。

「何の話だったかな……あー思い出した名前だな俺の名前は佐々木茂晴」

「それは偽名？それとも本名かしら？」

「名字は本当ですね。本名は明かすとちょっとね……」

「まあいいわ。私は蓬萊山^{ほうらいざん}輝夜^{かぐや}よ」

「蓬萊山？またけつたいな名字じゃのう」

聞いたことがない。

まあ佐々木は今の時代にはない名字なんだがwそれよりはましかw

「それで」

そういうと輝夜はずいっと顔を近づけてきた。

「もしかしてあんた結構偉かったりする？」

「一応庶民ですよ。戸籍上は」

「庶民が名字を持ってるものかしらねえ」

この時代は日本でも外国でも名字があるのはお偉いさんだけだそう

だ。

例外は妖怪とかかな。

一応名字はあるしねえ。

「実は結構偉いんですよ。都じゃあ庶民ですがね（笑）」

「変わってるわね……普通に馬車に乗って会いにくれればいいじゃない」

「馬車は嫌いだし、それにやっぱり地面に足をつけてないと落ち着かないしさ」

「もし私が月に住んでるって言ったらどう思うかしら？」

試している感じの目でこちらを見てくる。

「今は信じられないな。ただ時代が進めば人間も月の地面（重力があれば）に足をつけるかもな。まあ人間が月に住めるとは思わないね」

「そんなことはないわ結構普通に住めるものよ」

「なるほど輝夜さんの家は月かね？」

「ふん！月になんか帰りたくもないわ！」

「自分の故郷が嫌いかい？」

「ええ大っ嫌いよ！」

声色でわかる本当に怒っている。いや呆れていると言った方が正しいかもしれない。

月は、穢れ、がなくて、幸せ、に暮らせるんじゃないのか？ 永琳？

「そんなに嫌いか。そりゃあ相当ひどいところなんだろうなあ。月って言うのは」

「来月月に戻るの」

「そういやおかしな話だな。なんで輝夜はここにいるんだ？ 月の住人なんだろう？」

「不死の薬を飲んだの。月ではそれは大罪とされているわ」

「不死の薬ねえ……まるで書物でも読んでもみたいだ」

大罪で地球に暮らせるっていうのは連中が未だ地球は穢れてると思ってるってことだな。

やっぱりあいつらは許せないぜ。

本国に連絡をとって精鋭を揃えてもらおう。

今回は目を瞑るよりも早く殺ってやる。

「その罪を償うために私はここにいるの」

「地球をバカにしやがって……」

(！？ 殺気が……気のせいかしら。すごい殺気だったわ)

幸い輝夜にこの台詞は聞こえていなかったようだ。

思ったことを口にだしてしまうとは俺もまだまだ若いな。
内心はかなり喜んだんだが。

「なんでここにすることが償いになるんだ？」

「ここは私たちの間では地獄と言われているからよ」

地獄だってよ。

ついに人間の住む所じゃなくなったな。

これ月の連中皆殺しにしてもいいような気がしてきた。それくらい
純粹に腹が立った。

「地獄ねえ……結構なことを言ってくれるじゃないか」

「確かにここは綺麗事ではだめなところもあるけど素晴らしいところ
だと思うわ。私はここに生涯住みたいもの」

「輝夜が帰る日……もしかしたら奇跡が起きる（起こす）かもしれ
ないぜ」

「奇跡ね……期待しておくわ」

もう諦めたような顔をしている。

いや表面上だけかもしれないが。

心のどこかではまだ帰りたくないと思っているのだろう。

ふと外を見ると大して話してないと思っていたのにも関わらず夕方
になっていた。

「そろそろ帰る時間だな」

「あらそうなの。また……来てくれるわよね？」

「最低でもお別れはしにくるさ」

そして塀に飛び乗って地面に着地しようと思ったとき思い出した。
言いたいことがあったんだと。

「輝夜、お前はもう不老不死かもしれないが人生は決められるものじゃない自分で決めるものだ。罪なんざ関係ねえ！自分の生きたいように生きろ！それは地上の全ての生き物に与えられたいや最初から持ってるものなんだよ。じゃあな。また会うときまで元気で」

そういつて地面に着地した。

幸い陰陽師は気づいていない。まあ妖力は出してないから当然なんだが

警備員は知らない顔をしていた。空気を読んでくれたんだろう。

都の外の原っぱに横になって空を見る。

夜に半分侵食された空が見える。

そうか輝夜も月人か……なら不死でも1回は殺らなきゃいけないの
だろうか？

数億年前のもうどうでもいいような約束を思い出す。

誰かが覚えているわけでもないのに自分は頑なにそれを守ろうとする。

つまり月人をそれほど嫌っているということだ。

最悪笑いながら月人を撃ち殺すことも考えられなくもない。

「まあいいかそれはその時がきてから考えるさ……」

俺は妖怪が普通にでるその場所で眠ってしまった。

〱翌日〱

「もう朝か……はあ。こんなところで寝てたのか」

いくら近づかれればわかると言ってもさすがに無防備すぎる。
せめてテントでも張ってその中で寝たかった。

「気分は悪くないがまさかこんなところで寝るとはね」

俺も甘くなったな。

まあこの時代じゃあ狙撃兵に頭を狙われるなんてことはないからな。
妖怪に首は狙われてるかもしれないが。

とりあえず畑でも耕すか（異常思考）

っは！危ない危ない畑を耕すところだったぜ。

ま体に染み付いてる動作だからな。

仕方ないね。

〱1ヶ月後〱

今日は輝夜姫が帰る日なんだぞ☆

知ってる？そりゃあ結構じゃあでかい花火は見逃さずにすみそうだな。

〱移動中〱

「やっほ♪」

「驚かせないでもらえるかしら？」

意外と冷静。

もっと素直にビックリするかと思ったんだけどなあ。

「今日帰るんだろ？お見送りにきたぜ」

「うんありがとう」

あのわがままな輝夜が礼……だと？

明日は隕石でも降るのかもなあ。

「すごく不快な思考を感じたわ」

「気のせいですよ」

「そうかしらね……？」

少しこっちをというか思いつきこっち見てるね。

睨みつけてるね。目で人を殺せそうな勢いだね。

怖いなあ……やっぱりいつの時代も女性は強いねえ。

「さすがに帰りたくないところに帰るとなると元気がないですねえ」

「奇跡なんて起こるのかしらね？」

「奇跡を起こしてるのは神か人間か妖怪しかないさ」

人為的に引き起こすのは決して難しくはない。

魂っていうものさえあれば大抵のことは驚くことにできてしまうのだ。

「そんなものなのかしら……？」

「にしてもじいちゃんばあちゃんも心配してるじゃないか」

「心配しすぎよ。心配のしすぎで死にそうで怖いわ」

確かにおじいさんとか挙動があやしいもんな。

斧持って屋敷を見回ってるし。

あのおじいさん物語ほどこしやじゃないな。

まるで戦争にでも行ったことがあるような人だ。

……まさかな。

しかし怖いことは怖い。

見つかったら切り刻まれそうだ。

「心配してくれるならまだいいんじゃない？」

「まあね」

「お別れするからなにか送りたいなあ」

「気かきくのね」

「そりゃあ友人とお別れするんだからな」

「いつから友人になったのかしら？」

「え？」

こういうこと言われると結構ショックなんだよねえ。

「冗談よ」

「こりゃ一本とられましたなあ」

おもしろい冗談だな気に入った。（月行きの）ロケットを壊すのは最後にしてやる。

「最後の会話でも楽しみますか」

「最後だと思う？」

「今日のはやく帰らなきゃいけないんだ。仕事の準備があつてな。まあ夜にこれたらくるよ。じゃそういうことで」

「これたらねえ……」

輝夜と別れてから、都の外に待機していた部隊と合流した。

「ご苦労さん。状況は？」

「ご苦労様です。天皇が輝夜の身辺警護をするために、2000人程の兵士を屋敷に送り込みました。仲間とその兵士がすり替わっています」

「よし部隊の数はどうなってる？」

「戦車部隊が100輦で森に待機しています。また砲撃部隊も待機、ステルス機が偵察しています。」

「支援は？」

「海軍の主砲が範囲内です。後、戦闘機50機で援護するそうです」

「そんなに動かしただのか？」

「大きい花火のプレゼントですよ」

「そうかい」

相手が何人かわからないがそこまでいらないと思うな。
本気でかかるつもりなのが保険なのか。

どっちにしろ海軍に支援砲撃をさせたら都が木っ端微塵になっちゃう。
う。

建物は修復可能だが人は修復のしようがないからな。

「まあでかい花火を期待しておくよ。俺も分隊支援火器くらいはも
っておかなきゃな」

銃に触れたのが久しぶりな気もしないがそこはいいことにしておこ
う。

・・・うーん久しぶりに持ってみると結構重いような気がする
(従来の銃と比べるととても軽いです)
やっぱり改造しかないよなあ。

（数時間後）

まだ夕方だ。

改造には意外と時間がかからないもんだ。

名前 LMG・1900

使用弾薬 50・徹甲弾（条約なんてない時代だから人に撃っても大丈夫）

装弾数 2000発

重量 0.5kg

オプションパーツ 4×10倍率スコープ（暗視モード付き）フォアグリップ、強化サプレッサー、40mmグレネードランチャー（6発マガジン）

近年まで使われていたMK・48分隊支援火器は安定した性能だったため、人気だったが、あまりにも過酷な環境に耐えられなかったため世代交代とはった。

相変わらず弾倉や装備が4次元化している武器。これ1丁で戦車がぶっ壊れるレベルというか制圧射撃がこれだけで済んでしまう恐ろしい軽機関銃。

50口径のしかも徹甲弾は妖怪ですら撃つのをためらう程威力が強い。

しかし寒いところでも使えて、ジャングル、水の中でも運用が可能で軽いために特殊任務を帯びた兵士がよく持っている。

軽さ、動作不良の起こしにくさ、貫通力、遠距離射撃ができるなどの点でかなりいい銃。

フォアグリップとグレネードランチャーで火力が上がり反動が少ない銃でもある。

サプレッサーをつければ夜間、隠密任務にも使える。

部品が若干多いが銃の手入れが少なくても動作不良を起こしにくい。

こうして彼はきたるべき月の使者と戦う準備を進めたのであった。

く第七話く月人は全員殺すと約束したなあれは嘘だ（後書き）

うくん更新速度かあ・・・。

ゝ第八話ゝへへ、地上人を舐めんじゃねえよ（前書き）

なんだろう元々文才がないのは知ってるけど今回はひどす

「第八話」へへ、地上人を舐めんじゃねえよ

いよいよお迎えがやってくる時間の10分前になった。

いくら空からこようともうちの高性能レーダーにはかなわないのさ！

ささっと輝夜のところに行く。

気づいてないな・・・。。。

「輝夜輝夜」

「なに！？・・・脅かさないでよ」

そっちが驚いたおかげでむしろ俺がビックリしたわ。

危うく輝夜のアップーをもろにくらうところだった。

いくら退役軍人とはいえ・・・。。最近は少し呆けすぎてるな。

「悪い悪い。もう少しはやくこれと思ったんだが仕事の準備と帝の兵士に手間取ってね」

「月人の前では無意味なのにね」

「帝も輝夜を嫁にもらいたって腹みただな」

「自分の保身しか考えてない連中とは結婚なんてしたくないわよ」

「はは、そりゃごもつともで」

まあ逆に言えばそんだけ輝夜が綺麗ってことだな。

下手すればこれで見納めになるかもしれないし隠しカメラで写真でもとっておくか。

盗撮といえば盗撮なんだが正面きって頼めないしさ……………この時代にカメラ自体ないから仕方ないんだ。
輝夜お許してください！

カシャカシャ（シャッター音）

「……………？気のせいかしらね？」

「そろそろお迎えがきそうだったか？」

なんか死神がくるみたいな言い方だな（笑）

不老不死なら絶対にお迎えはこないと思うが（笑）

そう考えると死神も仕事忙しいそうだなあ。

第二次世界大戦の後とかどうなるんだろう……………？

うーん先のことはまだいいか。

今は月の連中の方だ。

「そうねそろそろね……………」

「2千人の兵士は月の人に勝てる？」

この質問は怪しまれないためにもしておかないといけない。

この時点で輝夜は俺が銃なんて物を知っているとは思っていないはずだからな。

まあそれがこの時代の人なら普通なんだが……………。

「結論から言って無理ね。あなたには目に見えない早さで矢が飛んだりしているのを想像できる？」

「想像はできるが実際あるかと言われたらないだろうな……」

多分比喻なんだろう。

この時代に鉄はあっても鉛はない、というか普通の人は鉄すら知っていないのかもしれない。

権力あったもん勝ちだからなあ。

とにかく知名度のある奴が欲しいんだろう。

嫁しかり、陰陽師しかり。

悪霊よりたちが悪いぜ。

権力に取り憑かれてる、悪霊もビックリだな。

「きたわ。すぐそこまで」

「もうきたのか。こりゃくる時間を間違えたかもな」

「遅いのよ！ 全く。もうこないかと思ってたわ」

「悪い悪い。まあ俺が月人に消されないことを切に願うよ」

輝夜が驚いた顔をしている。

「け、消される？」

恐る恐る、といった感じだ。

「そりゃ相手は俺達じゃ考えられない武器を持っていて、月からくるなら相当な文明とでも言えがいいのか。とにかくそいつらはその文明を見たやつを生かす気はないんじゃないのか？」

「そういうものなの？」

「少なくとも俺ならそうする。天才っていうのは恐ろしいものでな。ちよっと見ただけでも理解しちまうもんなのさ」

「知り合いにいますわ。その天才っていうのはね」

「そりゃあすごい人脈だな」

普通に話してるけど真っ暗な倉庫の中で話してるからね？
そして外には入れ替わったうちの軍の兵士が2千待機してる。
威圧感だけで追いつ返せるような気がしてきた。

「はあきたわ・・・・・・・・・・」

「戸が勝手に・・・・・・・・・・」

戸が恐ろしいくらい無音で開いたんだ、そりゃビックリするだろう？

「お別れかな？」

「ええ、そうね。じゃあさようなら」

「おうまた会えたらその時は俺の顔を忘れたなんて言わないでくれよ」

「あなたが不死なら会えるかもしれないわね」

「はは、そうかい・・・・・・・・・・じゃあな」

なんかしんみりしてきたやべ、涙でそう。

この変に涙もろいのはなんとかならないんだろうか？

まあ感情が残ってるのはいいことか……………。

「暇つぶしに付き合ってくれたことは感謝するわ。それとわざわざ別れを言いに来てくれたこともね」

「俺は変なところで細かいからな（笑）」

「そうかもしれないわね」

輝夜はふふっと笑って空を飛んでる……………馬車？からおりてきた月人と話始めた。

なんで馬車なんだろう？しかも馬いないからただの車じゃないか。月人の感性がわからん。

「姫様……………」

「永琳。私月にはもう帰りたくないの手伝ってくれるかしら？」

満月が明るくて輝夜の影になっててよく見えないがみたことありそうな人物だ。

誰だろう？月人に知り合いは1人しかいないんだが。

「姫様……………わかりました。私が時間を稼ぎますからそのうちに逃げてください」

「わかったわ」

するとその輝夜の向かいにいた人物が後ろにいた月人を2人矢で殺した。

展開はやすぎね？いや先手必勝とは言うけどもさ。

さすがに月人もどもってるぞ。

・・・・・・まあいい。俺が掃除の手伝いをしてやるか。

「すう。はあ。よいいくぞ・・・・・・一閃・幻影斬り！」

月人を斬る。もちろん血なんかつけないのでつかないように斬ったが。

「「!？」」

2人が啞然としている。

まあそりゃあ何が起こったかわからんわな。

「・・・・・・」

爺さんは月人の1人を斧で殺したようだ。

あの爺さん絶対只者じゃないだろ・・・・・・。

シュパン！という音がする。

作戦成功の合図と、月人の車にプレゼントだ。

対艦ミサイルを撃ったみたいだ。

車に当たった瞬間吹っ飛んだが、部品も飛んできてる。

危ね！小型な上にいろんな方面から部品が・・・・・・。

「死んだかと思った・・・・・・」

そしていつの間にかすり変わってた連中がいなくなってる。

さすが撤退のスピードがすごい。

「姫様油断しないでください。まだ残っているようです」

俺の方を向いて弓を構える。

「ここであんたを殺してもいいが、さすがに旧友とは殺り合いたくないね」

「彼方!？」

「どうも永琳さん」

「知り合い!？というか彼方ってあの!？」

やっぱりな。今度から本名名乗るのマジでやめよう。
精神的なダメージで死にそうだし。

「まあ俺の本名は佐々木彼方。覚えておいてくれ輝夜姫。にしてもこの場面で行動を起こすとはね」

「あなたが奇跡、奇跡言うものだから奇跡が起こってしまったのよ」

「奇跡は起こすもんだから仕方ないね」

にしても永琳がまだ生きてると思わなかったな。
相当な歳になってるよな。

いやまあ俺も人のことは言えないが。

「にしてもこんなところで永琳に会うとは思ひもしなかった」

「私もよ」

「じゃあさっさと撤収しますか。陰陽師の連中がそろそろきそうだからな」

「それもそうかしらね。姫様行きましょう」

「わかったわ」

く移動中く

ということ森にきました。

「よしここなら陰陽師の連中もこないだろう」

「あなたがあの佐々木彼方とは思わなかったわ」

「永琳はどんな話をしたんだい？」

「妖怪をいとも簡単に片付けた化け物ってところね」

「否定はしないけど化け物は酷いぜ・・・・・・・・・・」

うゝん今度から自重しよう。

どうも思考が平和的じゃなくなってきたなあ。
やっぱり田畑でも耕してリラックスするか。

「で？お二人さんはどこかに隠れるつもりで？」

「そうねえ。姫様もずっと外にいるわけにいかないし・・・・・・・・・・」

「なんならうちの連中に隠れ家を用意させようか？」

ザ・職権濫用。

難民救助のうちだから何の問題もないね。

「いいのかしら？ 確か昔「あゝその話はもういいよ」ふゝん」

「君達は実質月人ではないからね。だって地球に住むんだろ？」

「月にはもう帰りたくないわ……」

「だそうよ」

「わかった。すぐに用意させる」

《こちら彼方すぐに一戸建てを用意してくれ》

《了解。場所はどいうたしましょうか？》

《あの山だ》

《5分下さい。完成したら連絡します》

《了解》

あの山っていうのはなんか山そのものが妖力に包まれてるらしい。妖怪の山とかって言われたりするけどな。

最近是他のところの鬼が戦闘をしかけてきたりしてるらしい。

まあ安全区域ではある。

なにせ鬼も片手で倒せる兵士がごろごろいるんだからな！

《大将準備完了しました。いつでもどうぞ》

《了解すぐにそっちに向かう》

「よしお二人さんついてきてくれ豪華な屋敷にご案内だ」

「豪華ねえ………」

「しかし彼方は全く変わらないわね」

「そりゃいつまでも若いつもりですから。歳は言い訳にしかありませんよ」

生きる秘訣はなんたって気力だからね。

まあ馬車にでも轢かれないうり限り大体はこれで100まで生きれる。

ただこの時代っていうのは民主主義を掲げた日本という国でもないし、大日本帝国というわけでもない。

そしてなにより死ぬ要因なのは妖怪だ。

うちの国が独立してからというものの妖怪が人間を食うことはなくなつたが殺すことはなくなっていない。

むしろ増えているようにも感じられる。

増えているとつても1年に1回あるかないかの割合だ。

まあ純粹に戦争で死ぬ連中のほうが格段に多いが……。

「さてと、つきましたよ」

「大きいわね………」

「これに2人で住むの？」

「嫌だったか？」

「広すぎないかしら？」

「掃除なら兎の連中がやってくれるさ。イタズラ好きだが腕は確かだ」

「兎が世話してくれるってのもなんか変な感じね……」

「姫様ひとまずここに隠れましょう」

「そうね。わかったわ」

「いいみたいだな」

《本部本部。要難民を住居まで護衛したこれにて任務を完了する》

《衛星写真で確認しました。お疲れ様でした》

《了解》

「しかし俺が言うのもなんだがでかいねえ」

「あなたがつくった家ではないのね」

「陸軍の連中が急ごしらえでつくったんだろう。さすが長く生きることがあるねえ。職人技だよ」

「急ごしらえね……」

「まあ古参は数億年と生きてるし、常識は通用しないな」

まず人間じゃないからなあ。

そもそも常識っていうのはどのレベルなのかって話しになるからな。

「まあ私たちもかなり生きてるのだけれど」

「残念ながら俺より年上がいらないんだよなあ」

「永琳の知り合いが彼方とは思わなかったわ」

輝夜もさっきまでは動揺を隠せなかったようだが、今は幾分か落ち着いている。

「むしろ永琳がこんなに長生きなのがビックリなんだが……」

「私も不老不死なのよ」

永琳も不老不死なのか……。

「俺は歳も取るし無茶なことをすれば死ぬからなあ」

永琳達が不老不死でも俺は不老不死じゃないんだから、一緒にされると困る。

いや一緒にはされてないんだが。

「まああなたの長生きの秘訣は気合いだものねえ」

「気合い以外なら俺は本当の化け物。つまり人間じゃないってことになるだろ？それだけは嫌だからな」

まあつまり言い訳ってことだ。

自分が化け物だったら怖いから見ぬ振りをしてしまおうってな。こういう感情があるなら人間なんだろうか？

歳を取るとなにでも考えてしまうな。

若い頃は何も考えずに好きなことをしたもんだが。

まあそこらは仕方ないんだけどさ。

「まあ確かに人間ではあるわね」

「そういえば妖怪達が月に攻め入るって話があったわね」

「！」

妖怪が？月に攻めにいくだと？

まさかロケットで飛んでいくわけではあるまいし。

「それはどっからの情報だ？」

輝夜が言う。

「あら都では結構噂になってるらしいわよ？」

「まいったな……」

まだまだ平和、とはいかないようだな。

しかし月に行く手段はなんだ？どうやっていく………？

「瞬間移動ができる妖怪が仕切ってるって話だったわね。でも妖怪の話しなら彼方には関係ないんじゃないの？」

「いや、今や人間と妖怪の立場は平等だ。人間が妖怪を襲っても罰せられるし、妖怪が人間を襲っても罰せられる時代なんだ」

「難しいわね」

「それと妖怪も人間も若い連中が死んだら上の連中が困るんだよ。まあ若い連中には無謀なことに挑戦して命を落としてほしくないってのはあるが」

実際高齢化は問題になるからなあ。

「いくら増長した妖怪と言っても月の兵器には敵わないわね」

「俺が見たところ月の連中は武器に頼りすぎているな」

「片手で持てるバルカン砲なら下手でも当たるわ」

下手な鉄砲も数撃ちや当たるってか？冗談はよしてほしいね。あいつらの射程に入る前にかたずけるっての。

「そんな簡単にはいかないもんなのさ」

「そういうものかしら？」

「そういうもんだ」

「とらあえず当分はここに住めばいいのね」

「だな。じゃあまた仕事が増えたし行ってくるか。はあ……」

「

「大変そうね」

「まあね。でも最近は楽になってきたようん」

そう言い永琳と輝夜と別れる。

また仕事がありましたよ。

しかも面倒な。

面倒事に巻き込まれるのはもう体質とでも言えればいいのか。

でもでかい組織を仕切ってる以上多少の問題は仕方ないな。

まあ多少がどのレベルアップかってのは個人差があるんだろうけど。

まあそんなわけでまた里帰り（強制）をするはめになっちまったのは言うまでもない。

ゝ第八話ゝへへ、地上人を舐めんじゃねえよ（後書き）

まあ地道に頑張っています！

く第九話く今度余計な戦争をしようとしたらスキマを縫い合わせるぞ。

(前書き

なんかゆかりんの口調がおかしいぞ……orz

〈第九話〉今度余計な戦争をしようとしたらスキマを縫い合わせるぞ。

ということに戻ってきたとです。

まあ妖怪に関わる（しかも絶滅の可能性もある）問題は見て見ぬ振りにはできないからな。

とりあえず諜報部に伝えるだけ伝えたので、俺の仕事は完了！

え、助けに行かないのかって？

そりゃ引退したやつより現役のほうがいいだろう？

つまり面倒ってことだな。

まあ第一首謀者の場所がわからないからどうしようもないね。仕方ないね。

しかし瞬間移動できる妖怪ってのはどんな能力なんだか。

距離を弄ったりするんだろうか？

まあ能力とか霊力とかは俺の専門じゃないからわからないけども。

まあとりあえず最近妖怪が集まっていたらしい現場を調べるか。

「なにか見つかってくれればいいんだが」

正直、こういうのでなにか見つかるとは思えないが、念のためやらなければならぬ。

という思いつきで現場に行くことにした。

〈爺移動中〉

出た頃は朝だったのにもう夕方になってしまっている。

でも普通に歩くとまあそれくらいの時間はどうしてもかかるんだよ。

「さあてと調査に入りますか」

・
・
・
うゝん

・
・
・
むむむ……

・
・

とりあえずなにもわからなかったことは確かだ。

まあただの集会だっただけかもしれないし、そこまで気にすることでもないのかもしれないが。

「今日はここら辺で野宿でもするか」

本来夜の野宿は自殺行為だが、近くにこれといった、妖力はないので大丈夫と踏んだ。
されに心配があれば起きれるしね。

「……zzzz」

俺は知らないうちに眠りにつくのだった。

・
・
・
・
・

・
「ヴォ！」

急に目が醒めた。

……妖怪か。

この気配は間違いなく妖怪だ。

しかも妖力的にもかなりの妖怪みたいだ。

お目当ての妖怪かもしれない。

そうだったらかなり楽だが……こんな簡単に姿を現わすだろうか？

もし月に攻めようと大層な計画を立ててるならなおさらだ。

俺だったらもう少し慎重にやるが……。

なんにせよ確認はしにいこう。

く老人移動中く

「消えたな……」

さっきまであったかなり強い妖気はどこかに消えてしまった……と思う。

もしかしたら隠れてるのかもしれないけど。

つまり今度はこっちで探偵ごっこってことだ。

「だるい……」

たぐこういう仕事は諜報部にやらせればいいだろうに。

そう言いながらこれは自分からやろうと思ったんだと思う。

むむむ……やはり歳をとると忘れることが多くなってくるのだろうか？

アルツハイマーとか、痴呆症はいやだぜ？

まあそんな歳も軽々しく超えてしまっているかもしれないが。

「ふむ……誰かがいた形跡はあるな……しかし形跡を消していかなかったところをきると相当焦っていたようにも見える」

俺に追われているからではないと思うが、しかしそうだと誰に追われているのか……？

残念ながら考え事に向かない俺の頭では理解しきれないうえに推理もできない。

長生きしていてもこういうのは洗練されないってどういうことなの……？

とりあえず周りの警戒を厳にする。

持ってきたLMG（軽機関銃）を構える。

セーフティー（安全装置）を外す。

本来発砲許可無しで撃ってはいけないのだが、さすがに衛星があってもここまでならばれないだろうと思って銃を出した。

本当はだめなんだけどね。一般人が銃持ってるから（しかも許可なし）銃刀法違反で余裕で捕まるし……。

と言っても結構みんな違反してるんだけどね。

無秩序ではない、はず……。

まあそんなことは置いて置いて（え

今はその首謀者を見つけるのが先だ。

しかしそう簡単には見つからないわけでした。

それもそうだ日本は狭いといわれるが1人で捜すのがどれだけ大変か。

まあ地域は限定されてるが違う空間とか逃げ込まれたらどうしようもないしな……。

そんな四次元ポケット的な能力を使える妖怪がいたらほぼ無敵じゃ

ね？

俺
オワタ

まあ逃げればいいだけの話だから実は楽勝だったりする。
逃げ足だけは俺のお株だからな……。

ん！また気配が……。

待てよ……まさか誘ってる？

罠の可能性も高いか……捕まって拷問はいやだが虎穴にはいらずんば虎子を得ずというからな。

うーんどうしようか。

しゃあない気は進まんが見に行きますか……。

銃はしまつてと、よくよく考えたらこれじゃ臨戦態勢だもんなあ。
会っても話しもせずに攻撃されるのがオチそうだし……。

ということでもたその気配のほうに向かうことにした。

〈遺物移動中〉

はいまた気配が消えました……やってらんねえ。
もうゴールしていいよね……OK！じゃあ帰るか。

ササー（逃げている音）

＜◎＞＜◎＞

っは！見られてる！がんみされてる！
くそおどこにいやがる！

「だ、誰だ？」

こういうびびった反応は大事（だと思う）

そう思いながら開けた場所に出る。

もちろん返事なんぞ期待してない。

相手が妖怪なら返事の代わりに襲い掛かってくるに違いないが。

でてこないとなるとまた対策が面倒になってくるな……。

そーいやさっきからやけに妙な視線感じると思ったら空からだったんだよねえ。

空からどうやってみてるんだろう。

まさか衛星なわけないし、多分透明になれる妖怪ってところかな？

狙ってた妖怪はそいつかな……？

まあなんいせよ相手が姿を現さないのではどうしようもないので素直に帰ることにする。

これ以上ここにいても俺が疲れるだけだしね。

「ふう、気のせいだったかな」

これもさりげなく一般人ですよアピール。

まあ朝からずっと見られてたなら無駄なことをしたな。

まあ相手からなんらかのアクションもないからセーフなのだろう。

しかし監視とは……ただの腹が減ってる妖怪じゃないな。

中々手強そうな相手だ。

とりあえず報告はしておこう。

〽次の日〽

昨日の情報を報告したはいいが相手の姿が確認できないとなればどうしようもない。

ついでに今は自分の家でくつろいでる。

妖怪が滅亡しそうなきにとは思うかもしれないが休憩っていうのは案外大事なものなんだ。

それに今日、明日滅亡するわけじゃないしな。

ついでに言うとも明日滅ばないという根拠はない、が問題はないだろ。あいつらだってプロだ。

簡単にやられるたまじゃない。

たといえ相手が月だったとしてもな。

話しは変えるとして、どうしよう例の妖怪は。

陸海空軍の連中が殲滅とか言い出さないうちに見つけてO☆H A☆N A☆S Iしない。

しかしどうやってO☆H A☆N A☆S H Iしようか……。

ぶっちゃけ強引な手段とつてもいいんじゃない？

いかん（思考が）危ない危ない危ない……。

よしC O O Lになったから普通に探し回ることにする。

・ ・ ・ ・ ・

今日も昨日と同じ森に来たわけだが……。

明らかに見られてる。いや仕方ないわけだが。

俺が敵か味方はたまた中立なのかわかってないんだから相手側は様子を見るしかない。

空軍が今にも森を焦土にしような勢いだからはやくしないな。

ついでに言うともこれは無線傍ゲブンゲブン隊員から聞いた話だ。

「さあていつまでそのままでいるつもりなのか是非答えを聞かせて

ほしいねえ」

「……」

なんだろう目がたくさんある空間（？）みたいなのが開いた。

とりあえず感想は気持ち悪いというかずつと見てたら精神崩壊しそうとか。

とりあえずまともには見えない。

そしてその中から絶世とも言えるであろう美女が出てきたのだ！間違いな妖怪だ。妖気から見るに500年ってとこだな。

「どうも綺麗なお嬢さん。今日はあなたにお話があって来ました」

「いい話ではなさそうね」

扇子で口を隠しながら言う。

うさんくせえ……もうさ犯人は私ですよオーラーがでてるわ……。

ネタばれですよ壮大な。小説の最後のページだけ見た気分だわ……。

「昨日から監視しておられたんですから重々ご承知とは思っておりますが。用件は告げた方がよろしいでしょうか？」

「できれば告げてくれたほうがいいわ」

「了解致しました。率直に言わせていただきます。月から手を引け。月の連中はお前の手に負えるような奴らじゃない。増徴した妖怪を連れて行こうがやつらには準備運動にすらならん」

「それは脅し、と受け取ればいいのかしらね？」

この程度で脅しと取られても困る。
まあちよつと親切な警告ってところだ。

「警告だ。行きたいなら行け。だがどうなっても知らないぞ。これは経験者の話だ。よく、考えておけ。明日返事を聞きにくる」

これは脅迫と言われても文句言えないわ。

その妖怪とやらの目の前からっぽと消える。

久しぶりにはやく走ったぜ……。

うーん長い月日かけたおかげか使ってもなんら差し支えはないようだ。

まあ逃げてるときは光並みのスピードをだしているんだけど。

（八雲SIDE）

私は能力を確かめに力試しに月に行きたいと思った。
そんなときある情報が私の元に届く。

『もし行くならせいぜいあいつらに気をつけるんだな。地上にいる限りどこからでも見られてるからな』

この言葉が気になった。

もちろん計画の障害になる可能性が高いというのは色々な妖怪に指摘されたけど、私はそれをなんとか説得した。

若手の強い妖怪ばかりを集めた私はついに計画を実行に移すときが来たと思った。

でもそれは違った。

『地上にいる限り……』これは冗談でも嘘でもなく本当だったのだ。
この計画を建てた次の日からもう何かに見られてる気配……隙間で移動してもついてくる気配。

後ろにはなにもいない、もちろん上にも下にも横にも前にも。

『地上にいる限り……』もしかしたら計画をやめさせるために監視しているのかもしれない。

もしかしたら私を殺そうとしているのかもしれない。

妖怪の中でも若手の私でもわかる。

彼らが本気を出さなくても私やほかの妖怪を消せるほどの実力はあ
るのだということを。

それ以来計画は慎重に進めていくことにした。

計画は順調に進んでいったけど……都で爆発があったとか鉄の鳥が
いたとか色々な噂がたって、そういう類の噂がたつたびにみんな口
を揃えて『やつらの仕業だ』と言う。

奴らとは一体なんなのか。

計画のなかで最年長の妖怪に聞いてもわからないと言う始末。

やがて誰かがやつらのことは言っではいけないと言った。『言え
ば消される』と。

計画の中止も考えた。

でもいまさらやめるわけにもいかない。

結局そのまま進めようとしたわけだけど……。

今度は彼がきた。

その彼は元々その【やつら】の頂点だったらしい人間と言う話しだ。
人間？私はその思った。

いくら強いと言っても妖怪よりは寿命は短いし、身体能力も劣る。

しかし彼はその昔妖怪をいとも簡単に滅亡させてしまったらしい佐
々木彼方だと言うのだ。

私は心の奥で笑った。

いくら長生きでも数億年前の人間がさすがに生きていないだろうと。

『まあ彼なら話せばわかってくれるでしょう。決して戦ってはいけません。犬死するだけです』

最長年妖怪にまでこう言われた。

強いけど話せばわかる……つまりうまく言いくるめればなんとか取るも取れる。

しかしその妖怪に言われた。

『その考えはやめたほうがいいですな。気づく間もなく消されるのが目に見えてますから』

これから行く月の民よりよほど強いんじゃないかと私は思った正直に話すしかないのかと……。

しかし彼はそれで納得してくれるのだろうか？

もし彼にとって不都合なのであれば危ないかもしれない。

そもそも彼が生きている前提なのがおかしい。

そう考えていたらまたその妖怪に『彼は数億年生きている身です。

神すら消し去ってしまう彼にはどうしようもありません』

どれだけ規格外なのだろうか。

歳は数億で戦闘能力は神以上。

でも……話しは普通にできる。

人間はよくわからないわと思った……そのときは。

1日目は彼はなにもせずに帰っていった。

ごく自然なことを言い、私を捜しにきていないかのような演技。でも私は彼が私を捜しにきていたのは知っていた。

次の日……彼はまたやってきたあいかわらず普通の服装で。そして彼はいきなりこう言った。

「さあていつまでそのままにいるつもりなのか是非答えを聞かせてほしいねえ」

この様子からすると昨日から私の存在は知っていたのだろう。言葉こそ易しいが早く出てこいと言っている感じがする。

「……」

隙間を開いて彼の元へと出る。

彼は少し意外そうな顔をしていたが、すぐに無表情に戻ると

「どうも綺麗なお嬢さん。今日はあなたにお話があって来ました」

とあいさつした。

悪意も皮肉も感じないただ思ったことを言ったような感じ。

「いい話ではなさそうね」

私と話しをしに来たのは間違いなさそうだわ。

「昨日から監視しておられたんですから重々ご承知とは思っておりましたが。用件は告げた方がよろしいでしょうか？」

「できれば告げてくれたほうがいいわ」

聞きたくないと言いたいところだけど彼に意見を通すためには仕方がない。

私は聞くことにした。

「了解致しました。率直に言わせていただきます。月から手を引け。

月の連中はお前の手に負えるような奴らじゃない。増徴した妖怪を連れて行こうがやつらには準備運動にすらならん」

「それは脅し、と受け取ればいいのかしらね？」

声質は変わったけど脅しているようには見えない。ただこちらをまっすぐ見てやめろと言っているだけ。これだけなら怖くないと思った私が間違いだった。

「警告だ。行きたいなら行け。だがどうなっても知らないぞ。これは経験者の話だ。よく、考えておけ。明日返事を聞きにくる」

今度は少なくとも脅しではない。

行くなら殺すと顔で語っている。

そしてふと考え事をして、彼のいたところを見るとそこには彼の姿はなかった。

「なんなのよ一体……」

私は地面に座り込んだ。

極度の緊張感、殺気が解けた今、腰が抜けた。

本当に彼は親切心で警告してくれたのか、それとも何か企みがあるのか。

あの目……私をしっかり見ていたようで遠くを見ていたような気がする。

どちらにしろあの人間は少し、いやかなりおかしいと思った。

妖怪の話しに簡単に首は突っ込んでくるし、挙句計画をめっちゃくちゃにして警告。

返事の期限は明日まで……どうしようかしら？

とりあえず私は同族に意見を求めにいったのであった。

く第九話く今度余計な戦争をしようとしたらスキマを縫い合わせるぞ。

(後書き

読者の方々には感謝してもしきれません本当に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5766s/>

～東方古代録～

2011年10月12日02時02分発行